

N市X校区における住民自治意識調査¹

山本圭三²・八木紀一郎³・松本葉子⁴・高田雅弘⁵

1 住民意識調査の背景

この調査がおこなわれたN市は、大阪大都市圏の周辺に位置する衛星都市で、高度成長期に急速に都市化した地域である。現在は人口も減少気味で、住民の高齢化が進行している。市域は、幹線交通路と私鉄路線が走る平地部の市街地、住宅地として開発されたが起伏のある地域、さらに緑が残る丘陵の住宅団地地域からなっている。今回の調査は商工業と住宅の混在する平地部の住民自治会を中心にした「地域協働協議会」によって2015年の8月から9月にかけておこなわれたものである。

N市では任意組織である自治会が現在198存在しており、集会所や公民館を所有している自治会も多い。また、広報や回覧等の市からのお知らせについては、自治会長をはじめ、自治会の役員が中心となり、各自治会の区域内にある全ての世帯に配布している。このように、N市ではこれまで市民の強い自治意識によって自治会活動等への取り組みが行われてきたが、人口減少・少子高齢化の進行や地域ニーズ、地域の連帯感が変化するなか、2012年度に「地域協働推進プラン」を策定し、自治会を中心に地域の様々な団体が結集し、地域の課題を地域で解決していく地域協働の取り組みを進めている。地域協働の取組みを進めるうえで、地域ニーズに応じたまちづくりを担い、地域の課題解決に向けた活動・事業に取り組む小学校区を単位としたネットワーク型組織である「地域協働協議会」の設立を市内全校区の24小学校区で目指し、協議会の準備組織である「設立準備会」が発足すると、交付金の交付や市職員を担当として配置する等の支援をおこない、役員・部会等の組織体制の確立及び規約等の策定を経て、2015年4月をもって、全小学校区で「地域協働協議会」が設立された。

ここでその結果の概要を紹介する住民意識調査は、2015年3月に成立したX校区の地域協働協議会が、今後の活動の方向をさぐるために「X校区まちづくりに関するアンケート」として企画・実施したものである。摂南大学とのかかわりは、この地域協働協議会の役員から、同年4月に調査の実施にあたってのアドバイスと調査結果の整理・分析の依頼を受けたことにはじまる。それに本学の地域総合研究所の「北河内総合研究の枠組みづくり」の研究チームが応諾して、この地域協働協議会の委員会に数回出席し、調査票の作成へのアドバイス、調査票等の印刷、郵送回答分の回収、結果のデータ入力の手配と整理・分析を担当した。

¹ 本報告の現形態での公表をご許可いただいたN市X校区地域協働協議会に感謝します。

² 摂南大学経営学部講師、3.2、4を担当。

³ 摂南大学学長、1～3.1を担当。

⁴ 摂南大学看護学部准教授、5を担当。

⁵ 摂南大学薬学部准教授、5を担当。

調査の実施主体である地域協働協議会は、X 小学校の校区に所在する 7 自治会を中心に、各自治会から推薦された人や校区福祉委員会、校区自主防災会、および小学校 PTA、協議会に理解のある人で構成されている。調査票の配布・回収にあたっては、校区内の 7 自治会（役員等たち）と小学校 PTA の役員がそれぞれ担当した。調査票自体も無記名であるが、さらに回収のさいにプライバシーが守られるよう、のりつきの回収用封筒を配布し、自治会役員による直接回収と郵送（受取人払い）による回収の 2 方法を併用した。

摂南大学の研究グループの関与は、実施にあたってのテクニカル・アドバイスと調査結果の整理・分析・説明にとどまる。また、調査結果の検討会や広報活動にも協力を約している。本所報におけるこの調査結果概要の公表も、この協力とひきかえに、地域協働協議会の承認を得て行われるものである。

実施の日程は以下のものであった。

表 1 X 校区地域協働協議会アンケート実施の日程

2015 年	
6-7 月	協議会委員会の調査票素案に修正を加えて調査票を作成
8 月 10 日	市の広報配布と合わせて、調査票を地域協働協議会会長名の「X 校区まちづくりに関するアンケートのお願い」を付し、回収用封筒に入れて各戸配布開始
9 月 10 日まで	直接役員手渡し、および郵送によって記入済調査票を回収
9 月 30 日	回収をしめきり、業者に入力委託（10 月 21 日入力結果入手）
11 月 14 日	摂大 G、入力結果を全体として整理して地域協働協議会に返す
12 月 16 日	地域協働協議会委員会での結果説明 (協議会を構成している自治会ごとの調査結果がわかるようにして説明)
それ以降	結果の検討および広報活動を予定

2 調査地区の実態

調査がおこなわれた X 校区は、N 市の平地部にあり、その西部を南北に幹線道路が走っている。私鉄の N 市駅前から出るバスが主要な交通手段であるが、この駅にも歩いていける距離である。都市計画にそった市街形成がおこなわれているとはいえ、バス道路も狭い。2 階建てないし 3 階建ての個人住宅や 7-8 階程度のマンションを含む住宅などのなかに、小売やサービス業の店舗、物流施設や小工場が点在する下町型の地域である。

N 市の住民登録にもとづく統計によれば、調査が実施された校区に含まれる 6 町の世帯数、男女別および総人口は表 2 のようである。なお、地域協働協議会を構成する 7 自治会のうちひとつは府営住宅の自治会なので、市の統計区分では上記 6 町のひとつに含まれる。

表 2 N市町別統計表による当該地域の世帯と居住者(N市提供データより)

町名	世帯数	男性	女性	住民計	今回調査の 調査票配布 戸数
A町	840	858	787	1645	760
B町	552	545	540	1085	470
C町	758	819	926	1745	680
D町	477	538	474	1012	377
E町	610	600	615	1215	425
F町	382	365	395	760	263
計	3619	3725	3737	7462	2975

(※2015年9月1日現在)

また、この校区の年齢別人口構成（割合）は表3のようである。N市全体の年齢別構成と比較すると、9歳以下がやや少ないこと、10歳代がやや多いこと、40歳代がやや多いことが目につく。高齢者の割合については、この地域の特異性はない。

表 3 N市全体とX校区住民の年齢構成（『N市統計書 2014年版』より）

年齢	N市全体	同百分率	X校区	同百分率
0～4	9581	3.98	306	3.12
5～9	9910	4.11	370	3.78
10～14	10965	4.55	522	5.33
15～19	11852	4.92	597	6.09
20～24	11570	4.80	520	5.31
25～29	12049	5.00	469	4.79
30～34	13419	5.57	518	5.29
35～39	16789	6.97	621	6.34
40～44	20875	8.67	900	9.19
45～49	17496	7.26	769	7.85
50～54	14034	5.83	579	5.91
55～59	12552	5.21	519	5.30
60～64	16377	6.80	605	6.18
65～69	19469	8.08	770	7.86
70～74	18354	7.62	749	7.65
75～79	12268	5.09	493	5.03
80～84	7489	3.11	284	2.90
85～89	3757	1.56	136	1.39
90～	2011	0.84	70	0.71
総数	240829	100.00	9797	100.00

(※2014年10月1日現在)

表 4 X 校区町域での事業活動（『N 市統計書 2014 年版』より）

町名	事業所数	従業者数	卸売・小売	製造業・建設業	宿泊・飲食サービス	生活関連サービス・娯楽	医療・福祉	その他
A町	76	252	29	6	19	10	6	6
B町	52	262	12	6	17	9	2	6
C町	28	430	4	5	3	2	5	9
D町	53	1538	17	17	11	1	1	6
E町	44	203	12	5	8	11	4	4
F町	41	254	8	3	9	8	5	8
計	294	2939	82	42	67	41	23	39
N市全体	7548	65693	1803	1263	1142	799	664	1877

(※2012年2月1日現在)

また、この地域が下町型の商工業と住宅の混在地域であると述べたが、事業所の数とその従業員、また事業所の種類は表 4 のようである。幹線道路沿いに立地する一部をのぞいてほとんどが中小・零細事業所であり、N 市自体が商工業事業所の多い都市なので、この地区が際立って事業所が多いというわけではない。

この表でみると、事業所数が最も多いのは A 町、ついで D 町、B 町である。A 町はバス通りであり卸売・小売り店舗やサービス関連事業所が多い。D 町は幹線道路沿いで商業店舗が多いが、就業者が飛びぬけて多いのは、ここには大学と大企業の研究所が立地しているからである。所在事業所等をみると構成自治会ごとに多少の差異はあるが、それは質的な差異と言えるほどのものではない。実際に、自治会ごとに調査結果を比較検討してもみたが、自治会ごとの差が大きくあらわれた設問は多くなかった。したがって、この地区全体をまとめてとりあつかって支障ないものと思われる。

3 調査の実施状況

3.1 調査の関心事項

本報告には、実際に配布した調査票も付属資料として収録している。この調査票は、地域協働協議会の委員会が作成した素案をもとに、摂南大学の研究グループが配列や項目、回答法などについて修正提案をおこない、両者討議の上で完成した。

この調査票に付された「協力お願い」では、この調査は「まちづくりに関するアンケート」と呼ばれている。この呼び名からわかるように、この校区の地域協働協議会が住民意識調査を思い立ったのは、成立した地域協働協議会自体が何をすればよいのかを考えるためであった。そのため、(A) 住民が自分の町についてどう思っているか、(B) とくに地域の自治活動についてどれだけ関心があるかを知りたいと考えたからである。それに (C) 高齢化しつつある地域社会での重要問題である健康維持・保健・医療についての関心が加わっている。これについては、摂南大学の看護学部・薬学部の研究メンバーの依頼で、地域での看護師・薬剤師の活動に対する住民の要望

についての設問（第 16 問）も加えてもらった。大きくいって、上記の（A）（B）（C）の 3 つがこの調査の主要関心である。以下では、この調査票の設問について簡略にみていこう。

調査票自体の最初のページにある 4 問は回答者の属性を問う設問である。その特徴は、性別・年齢（第 1 問）、居住町（第 2 問）のほかに居住年数（第 3 問）と同居者（第 4 問）をとりあげていることである。

第 5 問から X 校区についての設問が始まるが、まず全体的に判断して「暮らしやすいところ」と思うかどうか（第 5 問）を回答してもらったうえで、「生活の利便について」「安全・マナーについて」「住民の交流について」の 3 領域で計 16 項目にわたって、5 段階で選択評価をさせている（第 6 問）。

第 7 問から、X 校区の地域活動に関連した設問が始まる。第 7 問では、「自治会」、「PTA」、「地域協働協議会」にわけてその活動への関心の程度を答えてもらい、第 8 問では X 校区で現在実施されている自主防災訓練や「ふれあいサロン」、おまつりなどについて参加したことがあるか、あるいは知っているかどうかを訊ねている。第 9 問では、地域の活動への参加にあたって重視する条件を選ばせ、第 10 問では地域の活動を盛り上げる方策を選択させ、さらに第 11 問で「防災・防犯」「高齢者福祉」「子育て支援」「青少年健全育成」「きれいな環境づくり」「地域住民交流」の 6 分野について、X 校区で今後積極的に取り組む必要があるかどうかを判断させている。

第 12 問では、地域活動にかんする情報伝達の適切な手段を選択させ、第 13 問で日常生活において今以上に情報が欲しい事項を選択させている。第 14 問では、ふだんの近所づきあいの程度について訊ねている。

最後に、健康や高齢化問題についての数問が配されている。まず、第 15 問で、「高齢者」と言うときの回答者にとっての年齢を訊ねている。とくに高齢者自身に実感をもって答えてもらうことを期待している。第 16 問は、校区での保健衛生や在宅医療などに関して看護師および薬剤師に期待することとその期待の程度について訊ねている。それに続く第 17 問で、回答者が心身の健康維持のために普段取り組んでいる事柄を選択して挙げてもらっている。最後に、校区の地域協働協議会や自治会などの地域活動についてのご意見を自由記述してもらう欄を設けている。

3.2 調査票の回収状況

表 2 に示したとおり、今回協働協議会を通じて配布した調査票数は 6 町で 2,975 票であり、それは住民登録上の世帯数比でその 82.21 パーセントにあたる。単身世帯向けアパートも多い地域なので自治会も全世帯を掌握できているわけではないが、住民の大半には調査票が配布されたといえる。

2 通りの方法で回収された調査票のうちこの有効回答数は、6 町内では 1370 票であるので、回収率は 46.05 パーセント、住民登録上の世帯数比でいえば 37.86 パーセントが回答したことになる。

ここ最近では、調査票を用いた計量的調査では回収率の低さが難点となることが多く、最終的な回収率が2割に満たないことも珍しくはない。そのようななか今回の調査では50%に迫る高い回収率となっていることから、地域協働協議会や自治会の役員だけでなく住民たちもまちづくりについて何かしらの関心を持っているのではないかと推察される。

なお、今回は小学校PTAを通じて上記6町以外のN市住民からも52票の回答が得られている。住民からの貴重な意見を無駄にしないためにも、本稿においてはこれらも集計に加えることにした。以下に示すのは、本稿で用いるデータの構成である。

表 5 本稿で用いるデータの構成⁶

		度数	%	有効%	累積%
有効数	A町	302	21.1	21.2	21.2
	B町	164	11.5	11.5	32.7
	C町	193	13.5	13.6	46.3
	D町	179	12.5	12.6	58.9
	E町	308	21.5	21.7	80.6
	F町	139	9.7	9.8	90.4
	G町	85	5.9	6.0	96.4
	その他	52	3.6	3.7	100.0
	合計	1422	99.4	100.0	
所属自治会 無回答		8	0.6		
		1430	100.0		

4 地域に関する項目の集計結果

以下に、地域に関する質問についての具体的な集計結果を示す。ここでは基本的に全体の集計結果を示していくが、年齢別の分析によって明らかな違いが確認された項目のみ年齢別の集計結果も示す。全体傾向しか示されていない場合は、「その項目に関しては年齢による違いが確認されなかった」ことを意味する。

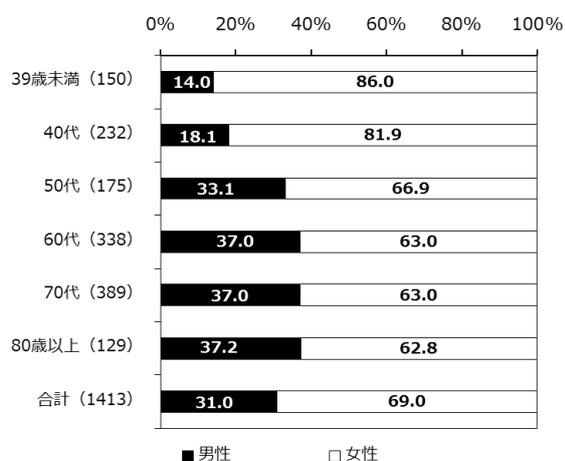
年齢別の分析結果で示している「 $p=〇〇$ 」は、年齢別の分析を行った際の有意確率である。これは、『年齢階層ごとに割合の違いがある』と判断して間違えている確率⁷を意味する。今回は、有意水準を5%と設定したため、ここでは『年齢階層ごとに割合の違いがある』と判断して間違えている確率が5%未満である」項目のみが掲載されることになる。

⁶ 表中にある「G町」は、先に述べた府営住宅の自治会でありN市の統計では他の町に属するものである。しかしG町自治会は独自に機能しており、今回の調査でもG町住民にはG町自治会役員を通じて調査票が配布されている。このことと対応させるため、調査票では自治会の選択肢に「G町」も設けていた。

⁷ この分析における帰無仮説は、「年齢階層ごとに割合に違いはない」である。

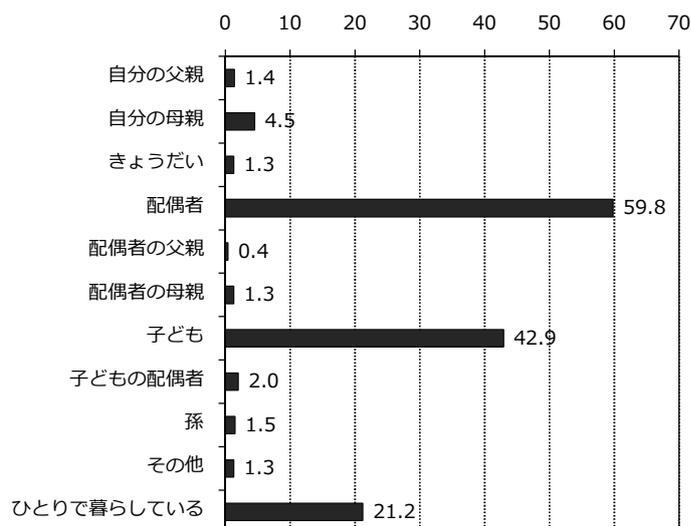
4.1 基本属性

(1) 性別（地区別結果 $p=0.000$ ）



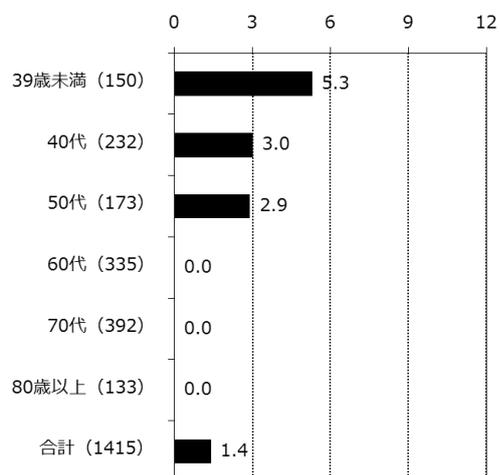
今回のデータでは、年齢階層ごとに回答者の男女構成比が異なっている。一般市民を対象とした調査では、往々にして女性の回答者が多くなる傾向があるといわれるが、今回のデータでは特に若い世代においてその傾向が顕著である。50代以上においては男性の回答も多くなっているが、それでも4割に満たない。

(2) 同居家族（問4）



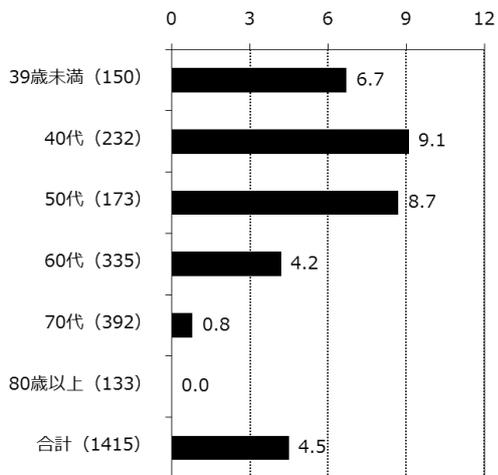
今回のデータにおいては、自分の親やきょうだいと同居している者が少ない。配偶者と2人で暮らしている、子どもと一緒に暮らしている、1人で暮らしている、と言ったのが主要なパターンのようなものである。

1) 同居家族：自分の父親（年齢別 $p=0.000$ ）



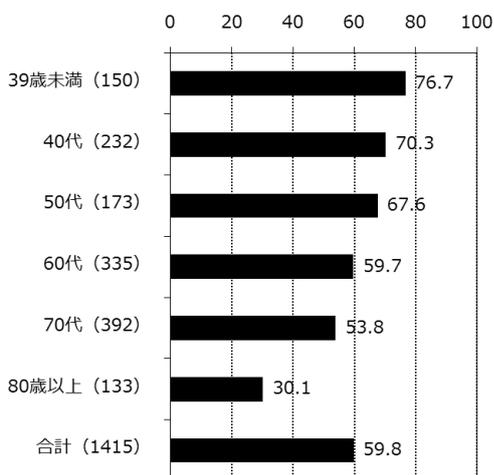
回答者の年齢層が高いこともあり、自分の父親と同居しているという回答は全体では少ない。ただし、50代までの年齢層では同居している者もいるようである。

2) 同居家族：自分の母親（年齢別 $p=0.000$ ）



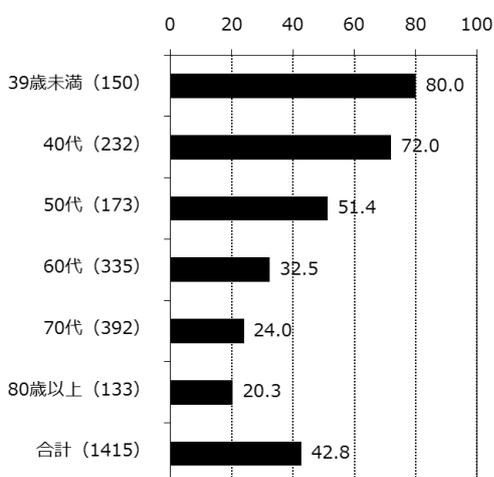
自分の母親に関しても同居しているという回答は全体では少ないが、年齢階層による違いも顕著にみられている。50代くらいまでの回答者では同居している割合が5~10%程度あり、60代でも4%程度となっている。比較的上の年齢層においても、母親と同居している場合は珍しくないようである。

3) 同居家族：配偶者（年齢別 $p=0.000$ ）



配偶者に関しては、年齢層が高いほど同居の割合が低下する傾向にある。死別している場合が多いと考えられる。

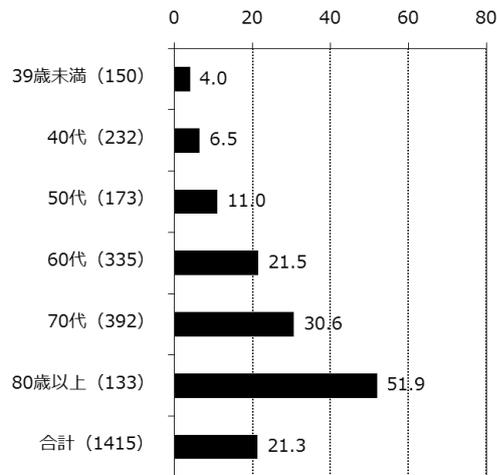
4) 同居家族：子ども（年齢別 $p=0.000$ ）



子どもに関しても、年齢層が高くなるほど同居の割合が低下する傾向にある。子どもが成長した後、独立して家から離れている場合が多いと考えられる。

若い年齢層においては同居の割合がかなり高い一方、高い年齢層では割合が低いこと、さらに親・配偶者との同居割合をかんがみると、N市X校区では若い核家族世帯と子どもが独立した高齢夫婦世帯という2つが主要なパターンであると考えられる。

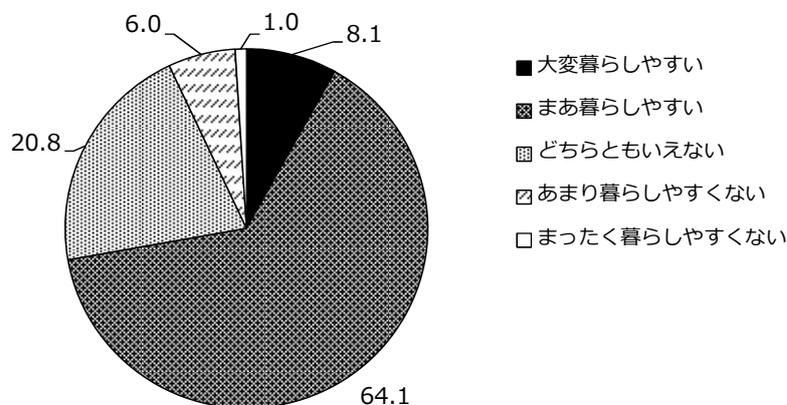
5) 同居家族：ひとりで暮らしている（年齢別 $p=0.000$ ）



60代以降は、年齢層が上がるたびに単身世帯の割合も高くなっている。高齢夫婦世帯として暮らしていたが、配偶者との死別をきっかけに単身世帯となっている場合が多いと推察される。

以上が、今回の調査対象者の基本的な属性である。このような回答者の属性があることを念頭に置きつつ、以下で各項目の集計結果を見ていきたい。

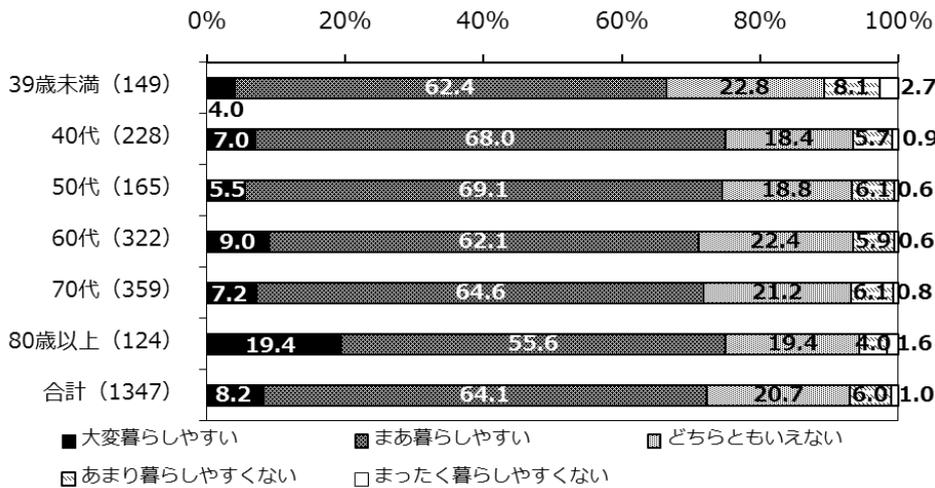
4.2 暮らしやすさ認知（問5）



全体で見た場合、肯定的な回答2つの合計は70%を超えており、回答者のうちの大半が「暮らしやすい」と考えているようである。

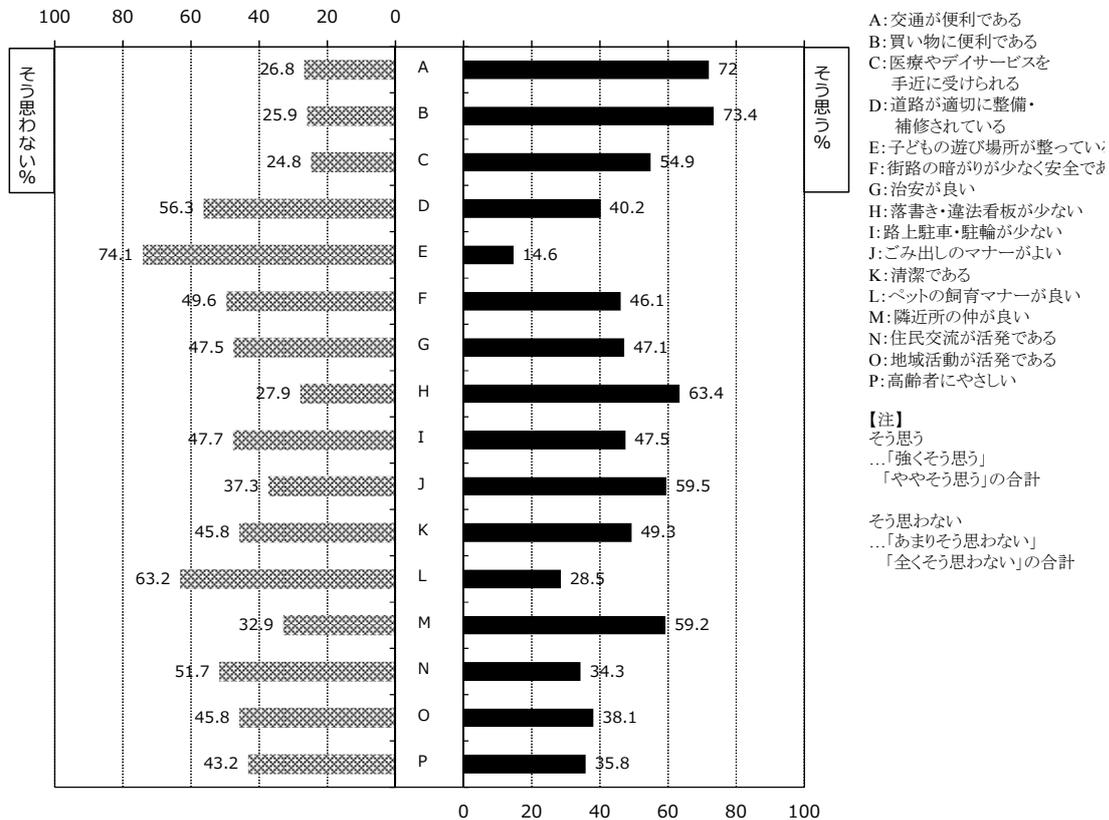
ただし、今回のデータに限った話ではないが、ここでの結果はあくまでも「回答してくれた」対象者のみの意見であることには注意が必要である。例えば、極端に否定的な意見を持っているような場合、わざわざ調査票に回答して返信するようなことを「面倒だ」と判断し回答じたいを拒否することもあり得る。したがって、ここでの回答はあくまでも「回答し、返信しよう」と判断した住民たちのみの意見の分布である、という留保をおいておかなければならない。

(1) 暮らしやすさ認知・年齢別 (p=0.014)



年齢別の分布を見ると、特に80歳以上の回答者において肯定的な回答が多いことが分かる。同時に39歳未満の者は否定的な回答を示している者も合計で10%ほどいることも示されている。高齢者の多くが「暮らしやすい」と判断している一方で、小さな子どもを抱えている可能性の高い若い世代で「暮らしやすくない」という回答が多くなっている、という対照的な傾向のあらわれている様子が読み取れる。

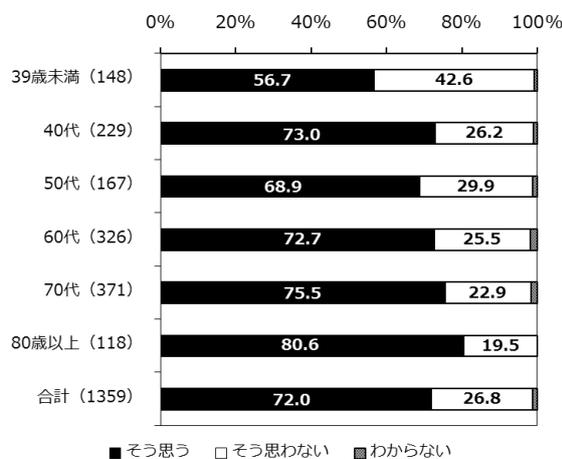
4.3 生活環境評価 (問6)



交通、買い物、医療・福祉サービスの受けやすさ、落書きの少なさ、隣近所の仲の良さに関しては肯定的な回答が半数を超えている。一方で、道路の整備補修、子どもの遊び場やペットの飼育マナーに関しては否定的な回答の多さが目立つ。また、隣近所の仲の良さについては比較的肯定的であるのに対し、住民交流や地域活動に対しては否定的な回答が多い。このことから、住民の評価が複雑に交錯している様子がうかがえる。

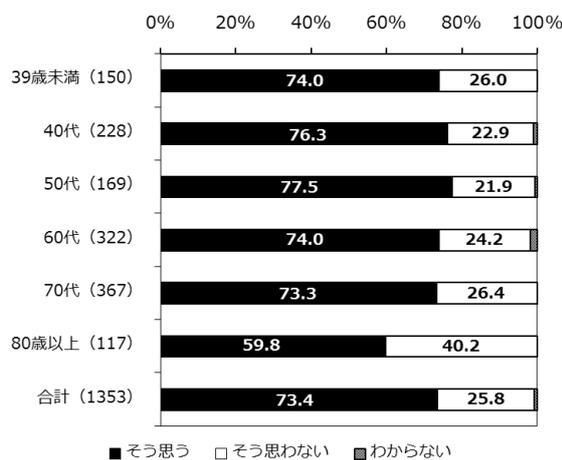
この項目に関しては年齢ごとの違いがいちばん多くみられている。少々煩雑になるが、以下でそれぞれの違いを示していこう⁸。

(1) 生活環境評価：交通が便利である (p=0.000)



交通の利便性については、年齢層が高いほど肯定的な回答を示す者が多いようである。高い年齢層の主要な交通手段はおそらく電車やバスなど公共交通機関だと思われるが、そうであるとすればこの地区の公共交通機関は住民のニーズを十分に満たしていると考えられる。

(2) 生活環境評価：買い物に便利である (p=0.001)

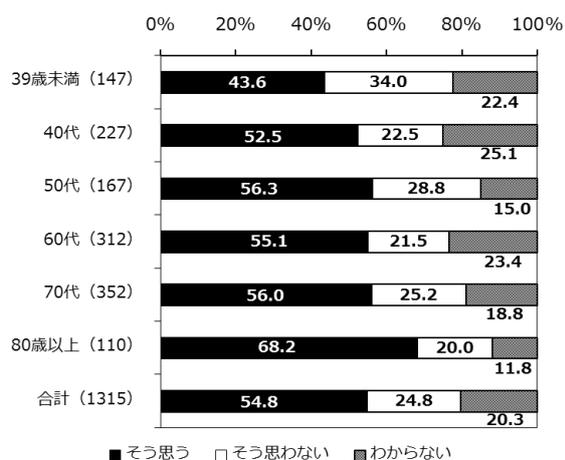


80歳以上の層においてのみ、肯定的な回答が少なくなっている。この地区の買い物の便は、高齢者層にとっては十分満足いくものにはなっていないようである。

⁸ 問6の全体での結果をまとめたグラフ、および以下に示される年齢別のグラフでは、基本的に「強くそう思う」「ややそう思う」は「そう思う」に、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」は「そう思わない」に統合されている。ただし、以下の年齢別の分析で示される有意確率は、統合する前の4段階の回答のまま分析をおこなった結果である。したがって検定結果とグラフは正確には対応していないことになるが、ここではグラフの見やすさを優先し統合した結果をグラフ化することになっている。

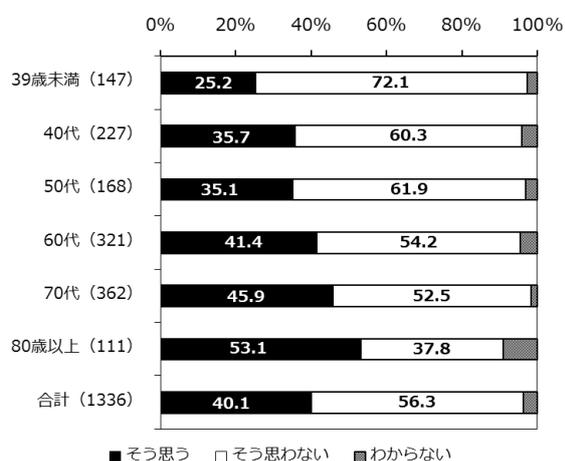
ちなみに、後で示される4.4(問7)、4.8(問11)の年齢別分析においても、同様の処理がおこなわれた結果が示される。

(3) 生活環境評価：医療やデイサービスを手近に受けられる (p=0.000)



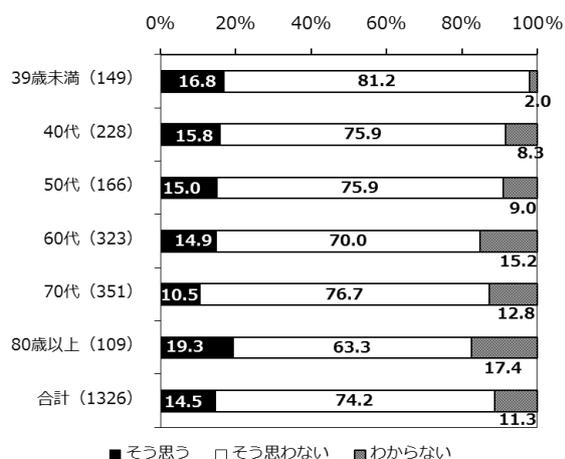
80歳以上の層では肯定的な回答が7割弱あり、サービスの中心的な受け手の大半が「サービスを手近に受けられる」と感じているようである。若い層では「わからない」という回答が比較的多いが、これは自分や家族の者がこうしたサービスを受けることが少ないことによると考えられる。

(4) 生活環境評価：道路が適切に整備、補修されている (p=0.000)



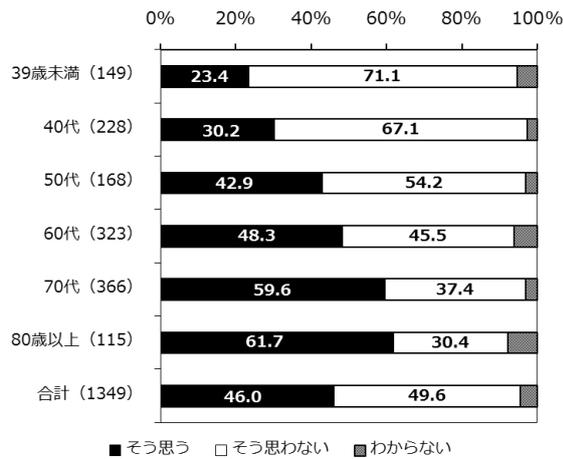
80歳以上の層では肯定的回答が5割を超えているが、それ以外は否定的回答のほうが5割を超えている。80歳以上の層では、自家用車を使わない者も多いと思われるが、この結果はそのことと対応していると考えられる。また、年齢が低いほど否定的な回答の割合が多くなっている点も目立つ。

(5) 生活環境評価：子どもの遊び場所が整っている (p=0.000)



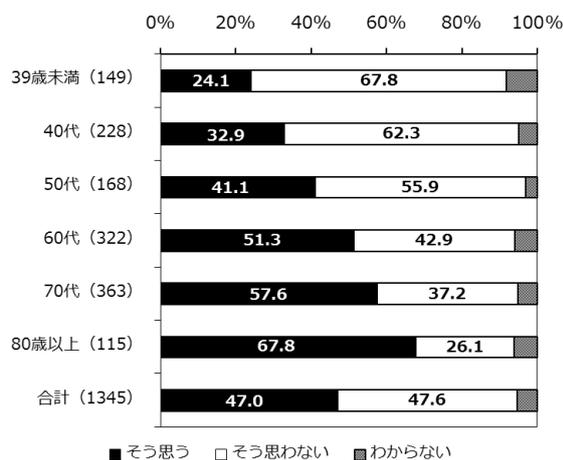
小さな子どもを抱えていることの多い39歳未満の層において、否定的な回答が特に多い。こうした層は町に対して「暮らしやすくない」と判断している割合が他より高かったが、このような子どもの遊び場に関する認識が「暮らしやすくない」という判断に結びついている可能性も考えられる。

(6) 生活環境評価：街路の暗がり少なく安全である ($p=0.000$)



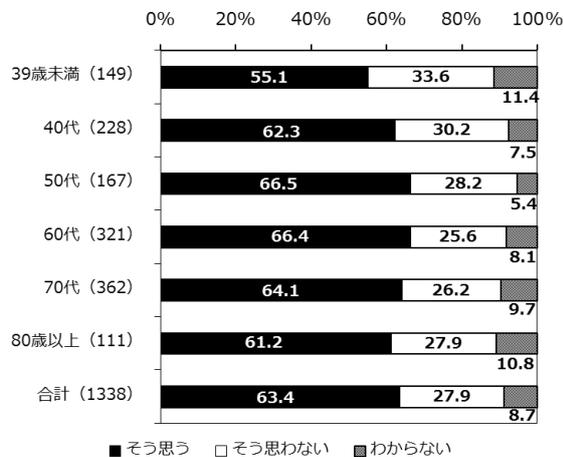
この項目は年齢層による判断の違いが顕著にあらわれている。若い世代は否定的であるのに対し、年齢の高い層では肯定的に見ている者のほうが多いようである。主とする交通手段の違いが、こうした判断の違いをもたらしているとも考えられる。

(7) 生活環境評価：治安が良い ($p=0.000$)



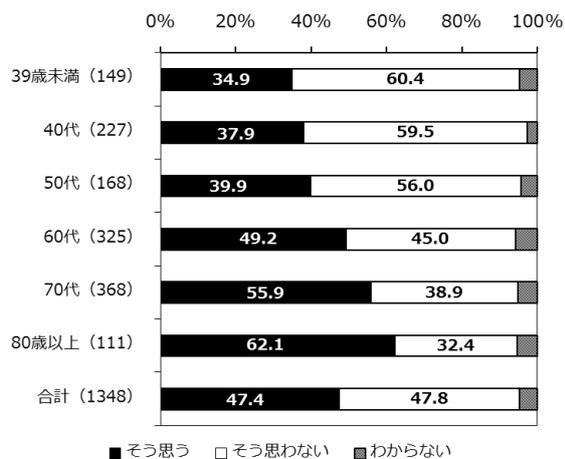
こちらも年齢層による違いが顕著である。若い世代は治安が良いと感じている者は少ないが、高い年齢層では治安が良いと感じる者のほうが多いようである。

(8) 生活環境評価：落書き・違法看板が少ない ($p=0.001$)



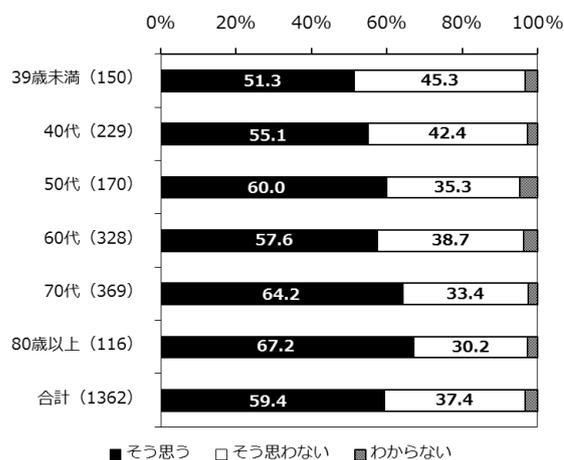
全体を通じて「少ない」と感じている者は半数以上であり、肯定的に見ている者のほうが多いようである。ただ、若い世代では否定的な回答を示す割合がやや多くなっている。高齢層の目には留まっていないものに対しても、若い世代は敏感に反応しているのではないだろうか。

(9) 生活環境評価：路上駐車・駐輪が少ない ($p=0.000$)



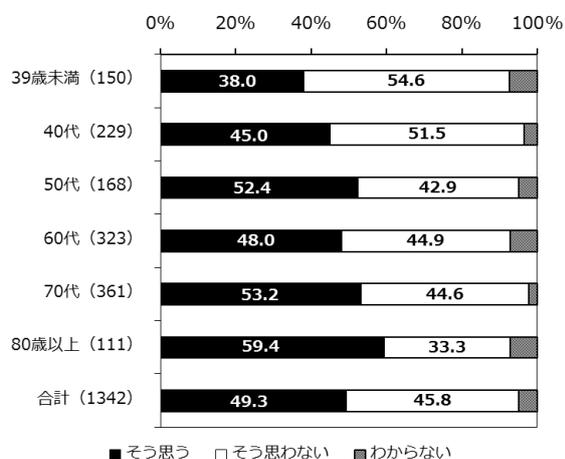
60歳あたりを境として、傾向が大きく異なっている様子がわかる。60歳以上は路上駐車や駐輪が「少ない」と判断するものの方が多いが、60歳未満では「少なくない」と判断している者のほうが多い。

(10) 生活環境評価：ごみ出しのマナーがよい ($p=0.000$)



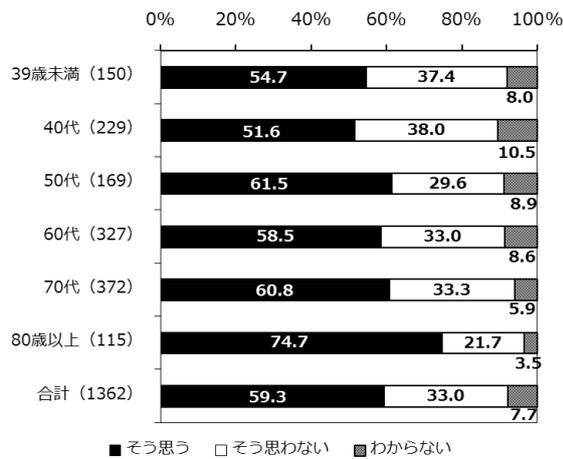
年齢が上がるにつれて、肯定的な回答を示す割合が高まっている。特に50歳未満の人びとにおいては、マナーが良いと思うものとよくないと思う者の割合が拮抗しており、意見が大きく分かれている様子がみてとれる。

(11) 生活環境評価：清潔である ($p=0.000$)



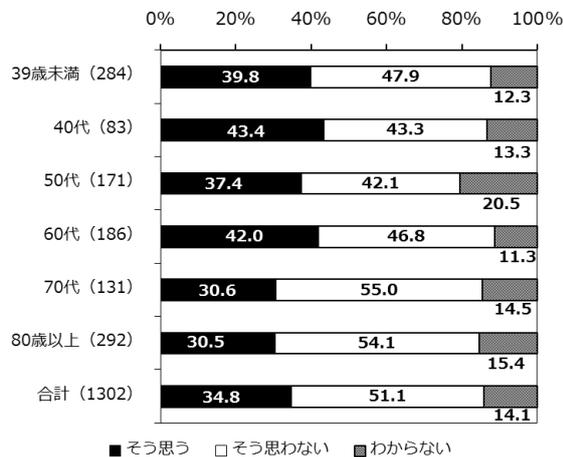
ゴミ出しに関する認識と対応するように、こちらも年齢層が高くなるにつれて肯定的な回答も多くなっている。

(12) 生活環境評価：隣近所の仲が良い ($p=0.000$)



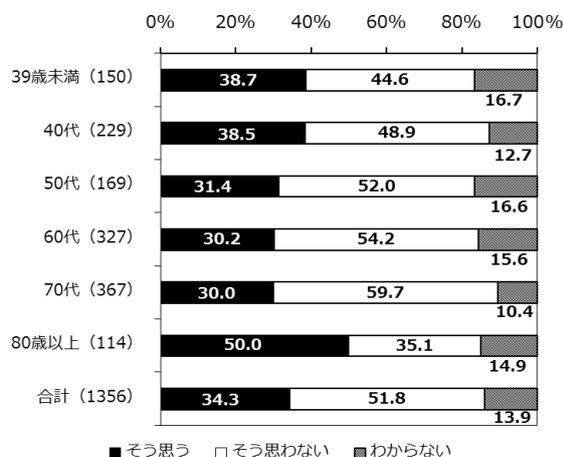
50歳未満、50～70代、80歳以上という順に肯定的回答が多くなってきている。他方、最も若い世代から60代までの人びとのうち一定数が「わからない」と回答している。隣近所の付き合いがまったくないゆえに、仲が良いかどうかも分からない人びともある程度存在しているようである。

(13) 生活環境評価：住民交流が活発である ($p=0.000$)



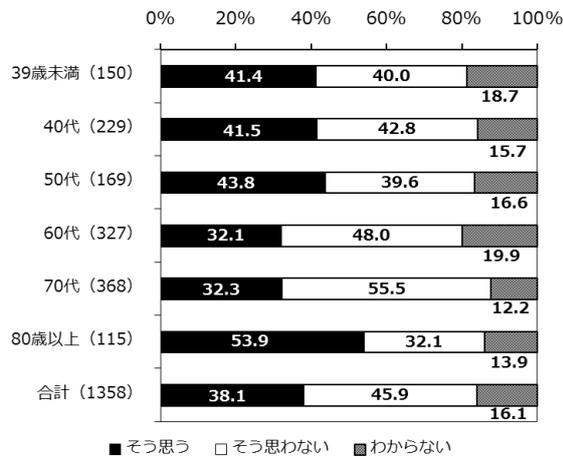
40代、60代において「交流が活発だ」と回答している割合が高い。80歳以上の人びとは「隣近所の仲が良い」と感じている割合が高かったが、「交流が活発になされている」とは思う者は少ないようである。

(14) 生活環境評価：地域活動が活発である ($p=0.000$)



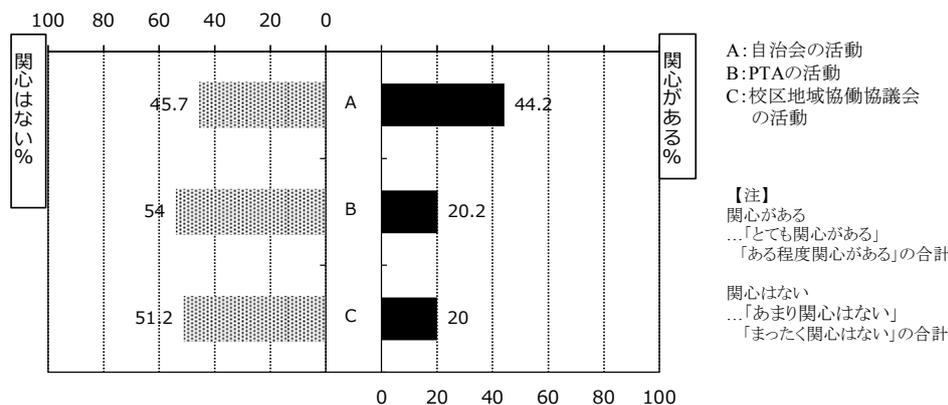
「地域活動が活発だ」と認識している割合は、80歳以上において最も高い。それに次いで割合の高いのが50歳未満の若い世代である点は興味深い。こうした層はこれまで否定的な回答に偏りがちであったが、地域活動についての認識は肯定的にみる割合が他よりも高いようである。

(15) 生活環境評価：高齢者にやさしい ($p=0.000$)



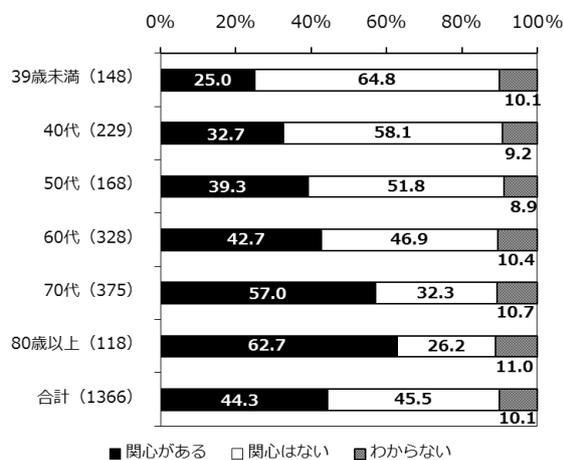
80歳以上の者は「高齢者にやさしい」と判断している割合が高いが、その下の年代である60～70代は「やさしいとは思わない」とする割合が他に比べて高い。こうした年代は、自分たちよりも上の世代の様子と近い将来の自分とを重ね合わせるからこそ、よりシビアな判断を下しているのかもしれない。

4.4 地域活動への関心 (問7)



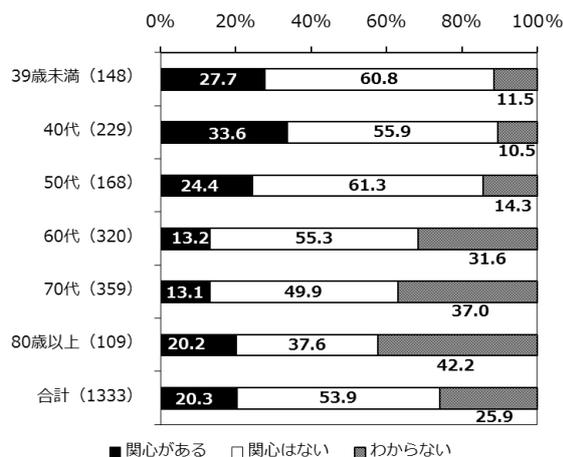
自治会活動は、他に比べて多く関心をもたれているようである。グラフには表示されていないが、PTA活動や校区地域協働協議会活動については、「分からない」という回答が25%程度あり、認知度の低さが目立つ。

(1) 地域活動への関心：自治会の活動 ($p=0.000$)



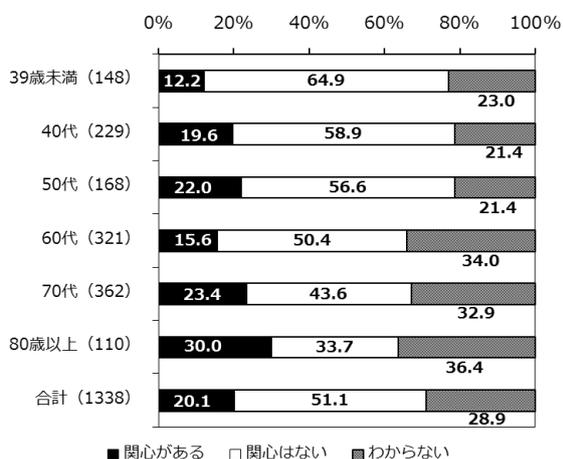
自治会活動に関心を持つ者は全体で見れば44%程度だが、年齢によってその割合は明らかに異なっている。年齢が高くなるにつれて関心を持つ割合が高まるようである。

(2) 地域活動への関心：PTAの活動 (p=0.000)



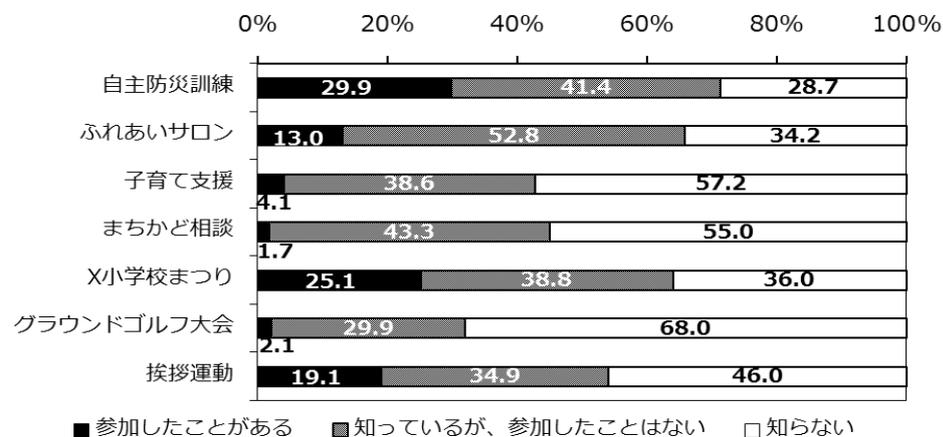
PTA活動は、自治会活動とは反対に年齢が低い者のほうが関心を持つ割合は高く、年齢が上がるにつれて「関心はない」「わからない」という割合が高まる。自分の子どもをきっかけとしてPTAに関われば必然的に関心も高まるだろうが、そうでない場合はあまり関心を持たれないのだろう。

(3) 地域活動への関心：地域協働協議会の活動 (p=0.000)



年齢層が上がるにつれて「関心はない」という回答が少なくなっている点が顕著である。若い世代は関心を持ちにくいだが、年齢が上がるにつれて関心を持つ者も増えてくる。また、高い年齢層では協議会の存在を知らない場合も多いが、そうした者が活動の内容などを知れば関心を持つ可能性は高いといえる。

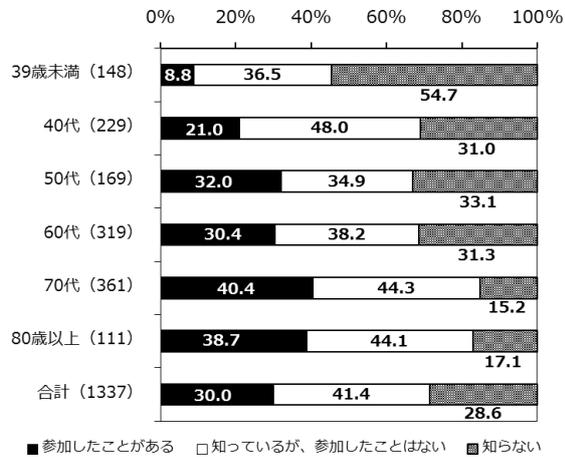
4.5 活動への参加経験 (問8)



子育て支援やまちかど相談、グラウンドゴルフ大会は「知らない」という回答が半数を超えており、認知度の低さが目立っている。自主防災訓練、X小学校まつり、挨拶運動は参加者が比較的多い(多くても30%未満だが)のに対し、ふれあいサロンは認知されているものの利用した者

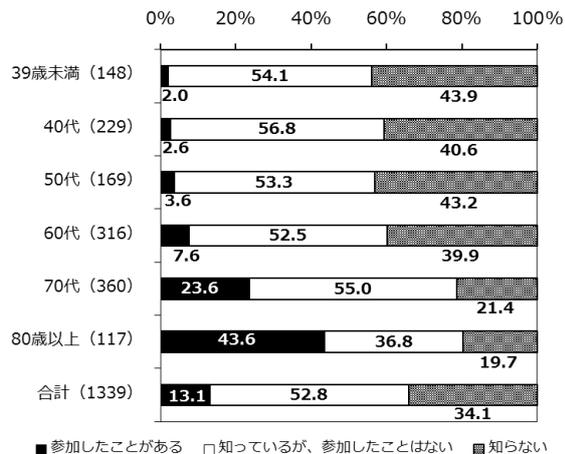
が少ない、という傾向があるようだ。

(1) 地域活動への参加経験：自主防災訓練 (p=0.000)



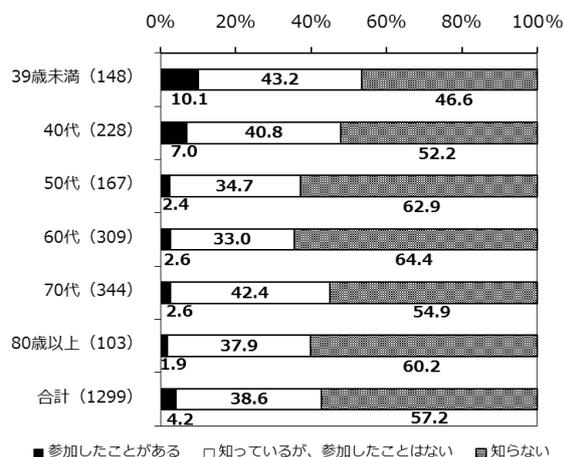
高い年齢層の方が、自主防災訓練に参加した経験を持つ割合が高い。他方、もっとも若い世代はその半数がそもそもそのような活動があること自体を知らないようである。自主防災訓練は、年齢層の高い者中心で運営されている様子が分かる。

(2) 地域活動への参加経験：ふれあいサロン (p=0.000)



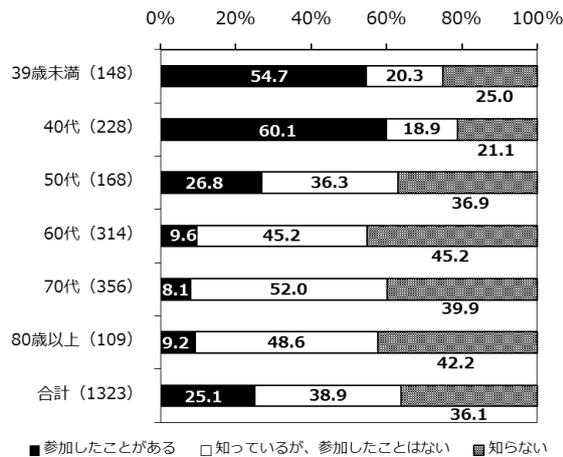
ふれあいサロンは、70代以上になると参加率が一気に高くなるようである。60代以下では参加率はかなり低いうえに、4割程度はそもそもサロンのことを知らないようである。

(3) 地域活動への参加経験：子育て支援 (p=0.000)



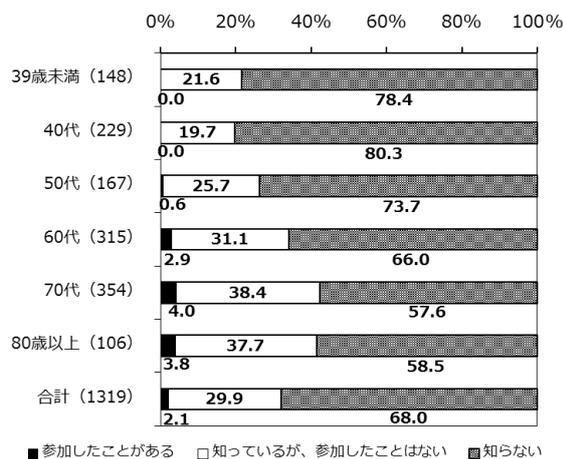
50代以上で「知らない」という割合が6割程度であることは不自然ではないものの、40代未満でも5割程度が「知らない」と回答している点は目立っている。最も利用する可能性の高い層においても半数には知られていないし、参加率は1割ほどしかない。

(4) 地域活動への参加経験：X 小学校まつり (p=0.000)



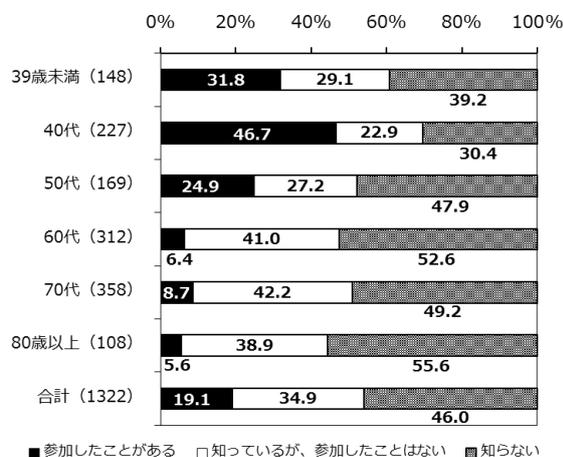
子どもが通っている場合が多いと思われる 40代以下において、参加経験を持つ割合が高い。他方、60代以上で参加経験を持つ者は1割に満たない。小学校まつりは、比較的若い世代中心の活動になっているようである。

(5) 地域活動への参加経験：グラウンドゴルフ大会 (p=0.000)



若い世代は、大半が大会自体を知らない。60代以上になると多少は認知度も上がっているようであるが、知っていたとしても実際に参加するものはごく限られた人たちのみのようである。

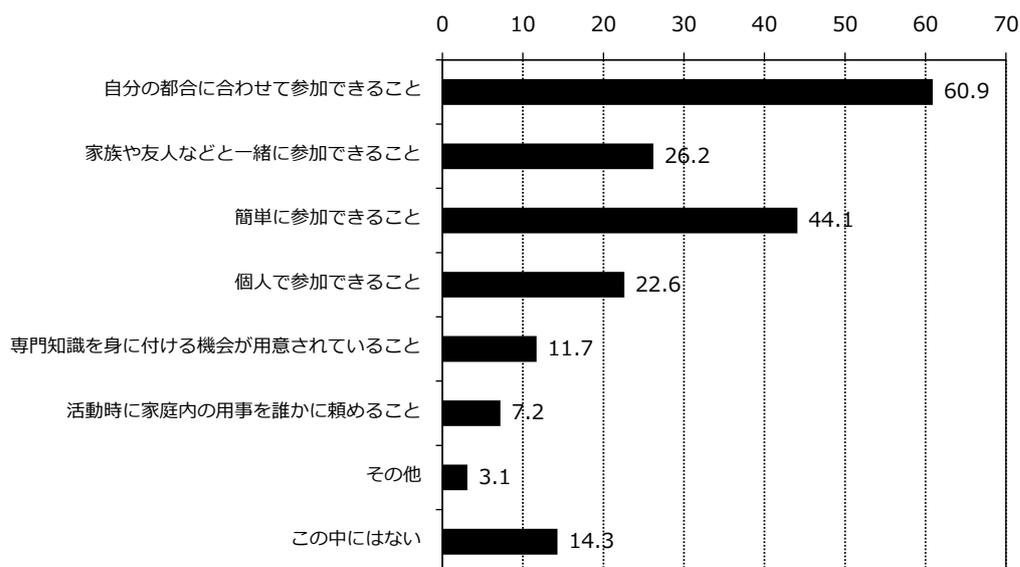
(6) 地域活動への参加経験：挨拶運動 (p=0.000)



小学校まつりと同様、挨拶運動に参加した経験を持つ者は若い世代に多い。60代以上では約半数が運動を知らないようであり、挨拶運動も若い世代中心の運動になっている様子が見て取れる。

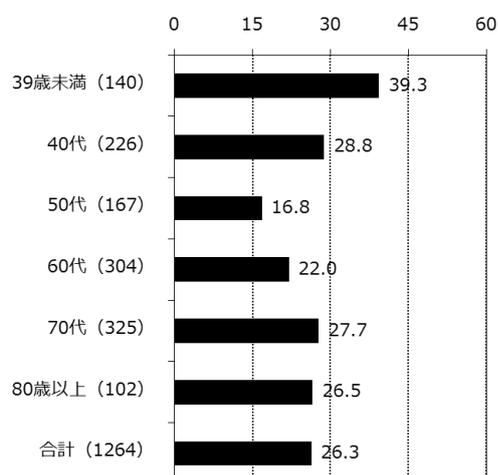
ここでの結果を総じてみるに、X 校区では様々な取り組みが設けられているものの、取り組みごとに参加する年齢層には偏りが生じているような印象を受ける。先の「生活環境評価」において住民間交流については否定的な意見も多く見られていたが、そうした評価がなされているのは、このような各種取り組みにおいて様々な年齢層が入り混じることの少なさからくるのかもしれない。

4.6 活動参加時重視要件（問9）



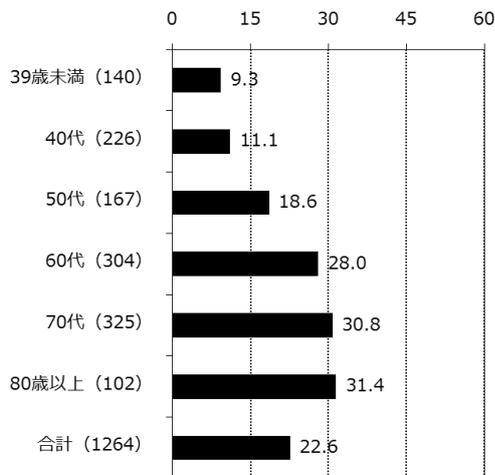
「自分の都合」との兼ね合いを考慮するものが最も多いようである。簡単に参加できることも比較的重視されているようだが、それでも半数には達していない。個人で参加できることを重視する回答と、一緒に参加してくれる者を重視する回答がほぼ同程度であり、「ひとりで参加」「みんなで参加」という声はどちらも同じくらいのものである。

(1) 活動参加時重視要件：家族や友人などと一緒に参加できること ($p=0.000$)



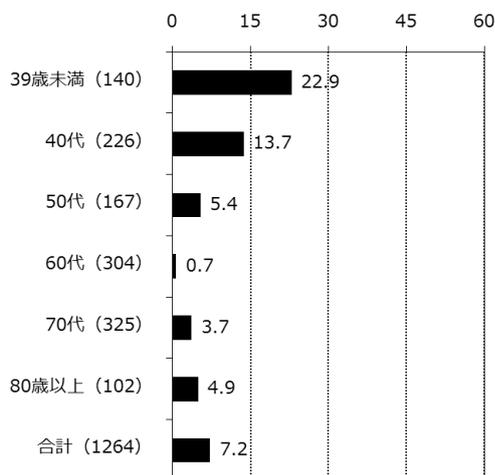
もっとも若い世代は、他に比べ家族や友人など親しいものとともに参加できることを重視する傾向にある。若い世代は「地域の活動＝年齢層が高い人びとが多い」と感じており、一人で参加することを躊躇しているのではないかと考えられる。

(2) 活動参加時重視要件：個人で参加できること ($p=0.000$)



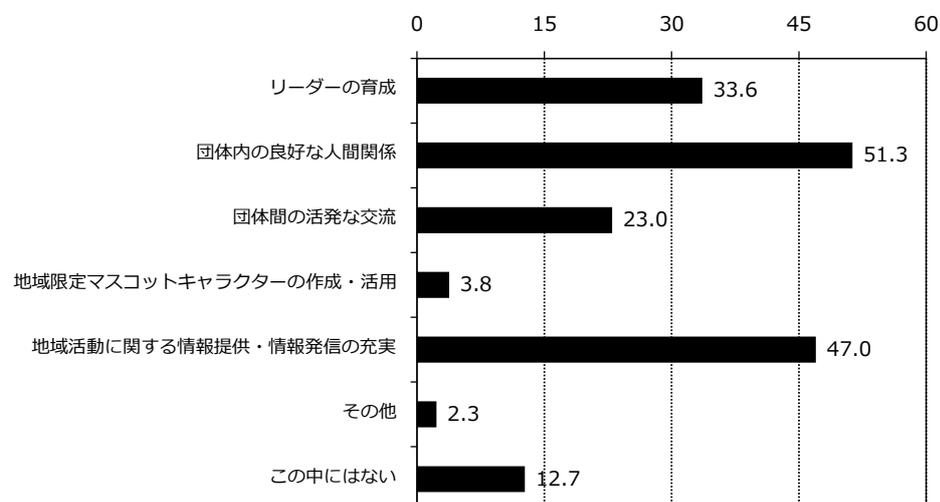
先の項目とは対照的に、こちらは60代以上の高い年齢層において、「個人で参加できることが重要だ」と回答する割合が高い。地域活動の中核となっている人びとは、共に参加してくれる者の必要性を感じていないようである。

(3) 活動参加時重視要件：活動時に家庭内の用事を誰かに頼めること ($p=0.000$)



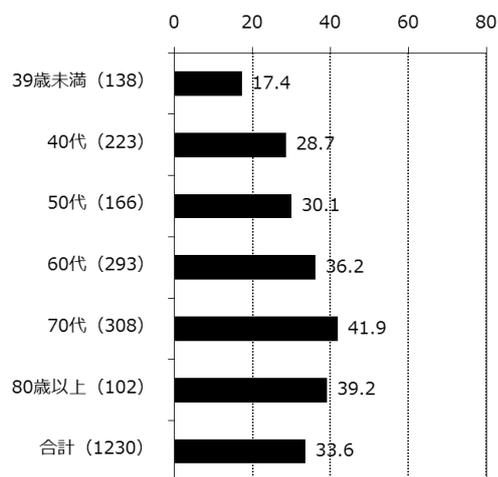
40代以下の若い世代は、他よりも重視する傾向にある。若い世代は、家庭内の用事で手が離せないために参加できていないのかもしれない。逆に言えば、家庭内で用事の分担ができるようになれば、若い世代の参加も期待できそうである。

4.7 地域活性化に必要な条件 (問 10)



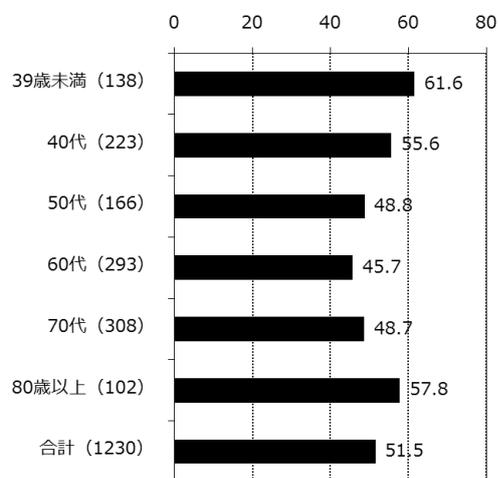
人間関係、情報の提供と発信という回答が多くを占めている。他団体との交流やキャラクタの作成などといった回答は多くなかったため、X 校区住民としては地域外の要素ではなく、内部の要素を拡充させたほうがよいと考えているようである。

(1) 地域活性化に必要な条件：リーダーの育成 ($p=0.000$)



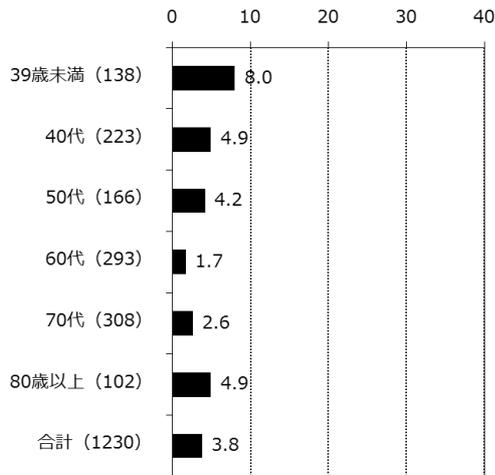
60代以上の高い年齢層において、選択している割合が高い。年齢の高い人びとが、リーダーシップをとってくれる若い世代があらわれるのを期待しているのではないかと推察される。

(2) 地域活性化に必要な条件：団体内の良好な人間関係 ($p=0.015$)



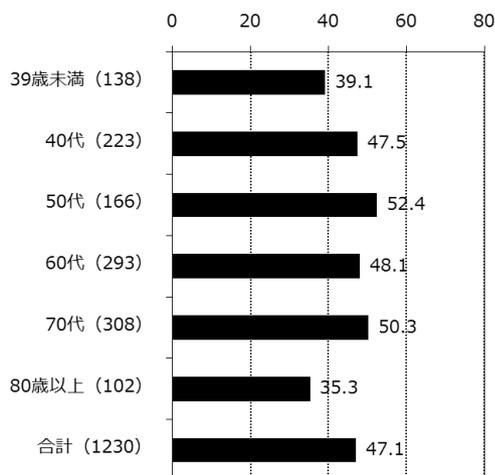
50～70代の人びとに比べて、40代以下、80歳以上の人びとにおいて望む声が多くなっている。最年長の世代と下の世代、最も若い世代とそれ以上の世代の間で交流があまり円滑になっていないのかもしれない。

(3) 地域活性化に必要な条件：地域限定マスコットキャラクターの作成・活用 ($p=0.029$)



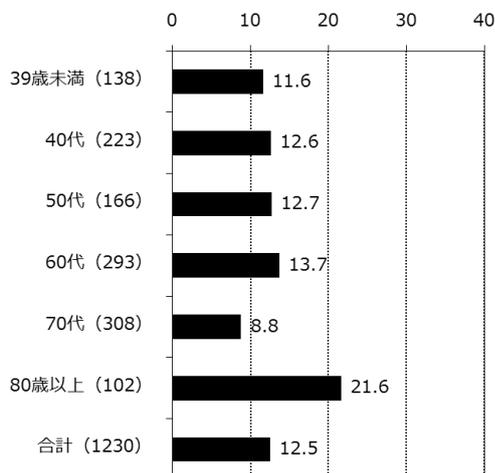
「ゆるキャラ」に代表されるマスコットキャラクターは基本的に期待されていないようだが、特に60～70代においてはその傾向が顕著である。

(4) 地域活性化に必要な条件：地域活動に関する情報提供・情報発信の充実 ($p=0.028$)



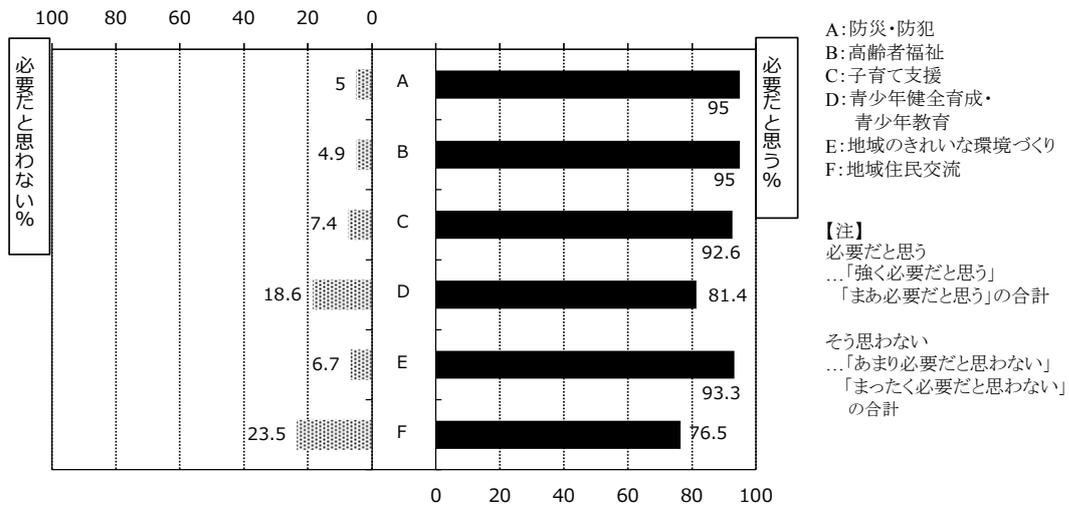
40代～70代の人びとにおいて、これを望む声が多くなっている。若い世代は4割未満となっているが、これは後述する情報収集ツールの違いによるのではないかと推察される。

(5) 地域活性化に必要な条件：この中にはない ($p=0.034$)



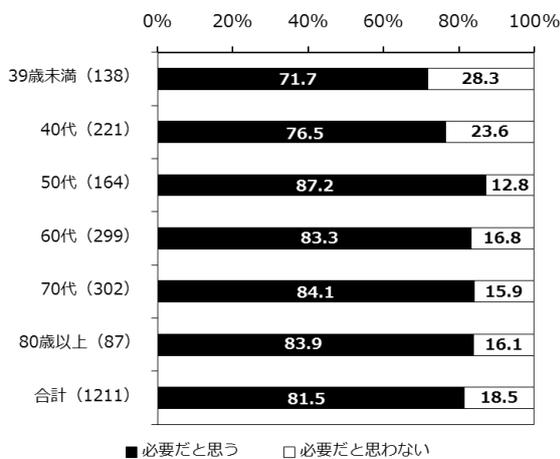
80歳以上の世代において、多く選択されている。こうした人びとは、ここで挙げられているものとは別の、独自の意見をもっている可能性が高いと考えられる。

4.8 今後取り組むべき活動（問 11）



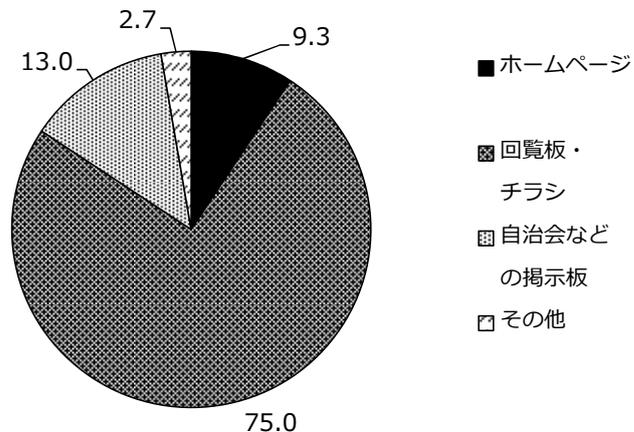
全項目において必要だという回答が大半を占めているが、なかでも防災・防犯、高齢者福祉、子育て支援、環境づくりへの希望は特に高いようである。

(1) 今後取り組むべき活動：青少年健全育成・青少年教育に関する取り組み (p=0.002)



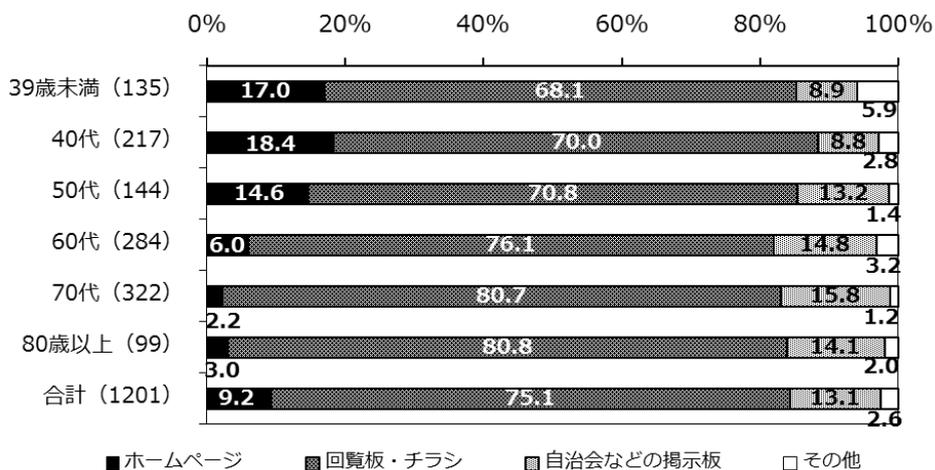
50代以上において、必要だと考える回答が多くなっている。こうした世代では特に、現代の子どもたちの在り方について気にするところがあるのだと思われる。

4.9 地域情報収集ツール（問 12）



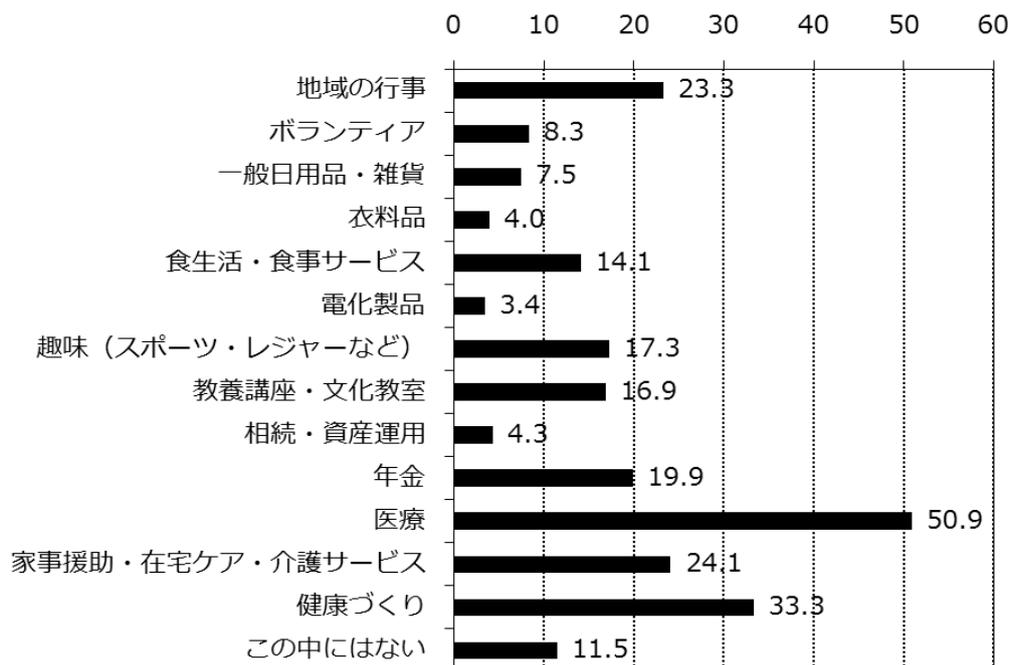
X 校区の住民は、主に主に回覧板・チラシで地域の情報を得ているようである。ホームページから情報を得ている住民は決して多くなく、地域情報に関してはやはりアナログ的なツールが有効なようである。

(1) 地域情報収集ツール・年齢別 ($p=0.000$)



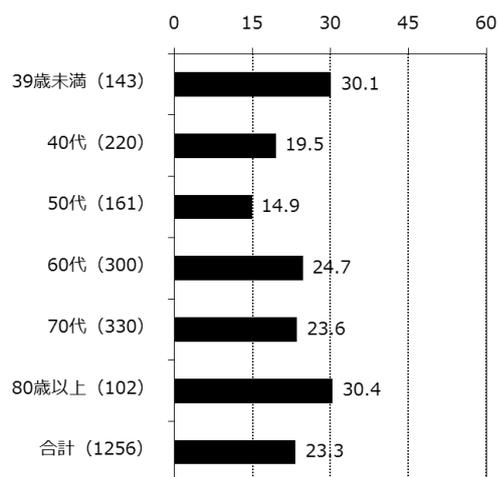
全体の分布では1割に満たなかったが、50代以下に言えばホームページから情報を入手している者もある程度いるようである。現在は50代までのようであるが、今後はこのような情報収集スタイルがさらに広がっていくと予想される。

4.10 日常生活で求める情報（問 13）



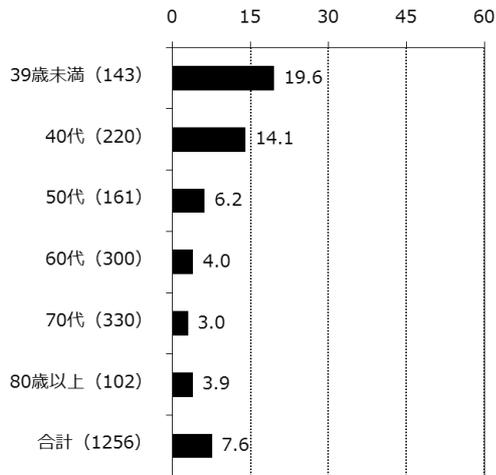
医療に関する情報を求める割合が群を抜いて高いが、これは本データの回答者の半数が60歳以上であることを反映したものだと考えられる。医療に次いで、健康づくりや地域行事に関する情報などが求められているようである。

(1) 日常生活で求める情報：地域の行事 ($p=0.011$)

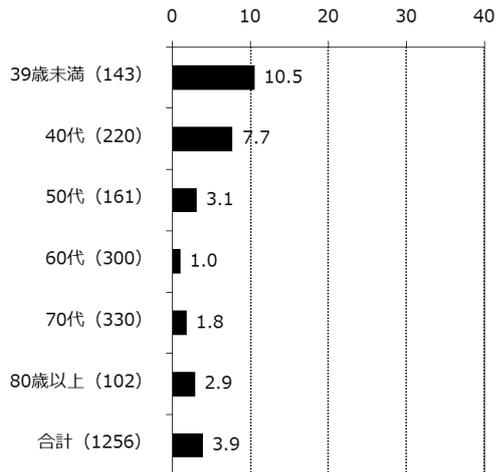


40代、50代以外の人びとにおいて、情報を求める声が多くなっている。40代、50代の人びとは、現時点で地域行事を中核的に担っている場合が多く、それゆえ特に情報を求める必要がないため、このような結果になったのではないかと推察される。

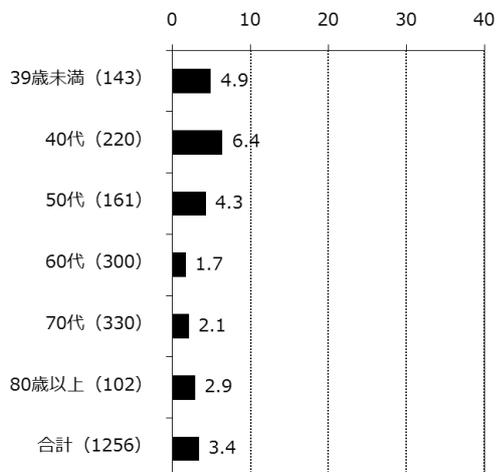
(2) 日常生活で求める情報：一般日用品・雑貨 ($p=0.000$)



(3) 日常生活で求める情報：衣料品 ($p=0.000$)

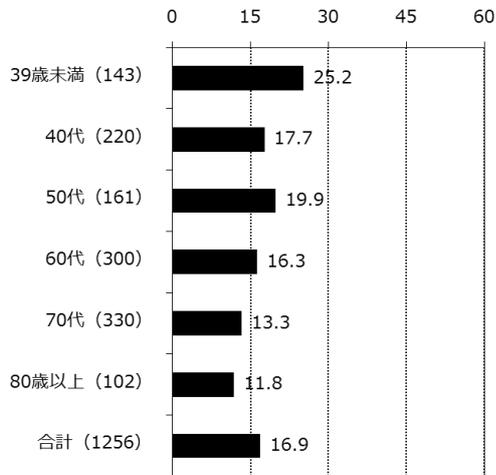


(4) 日常生活で求める情報：電化製品 ($p=0.040$)



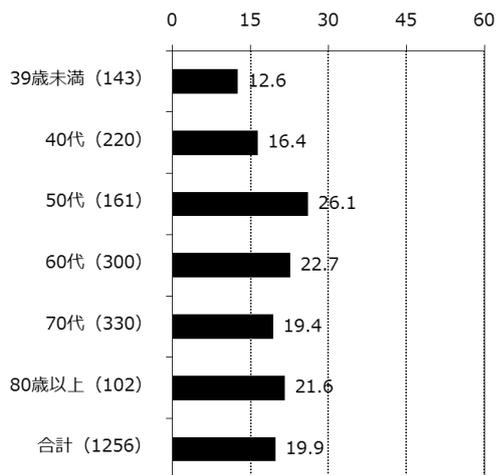
ここで示されている3項目については、40代以下の若い世代で情報を求める声が多いという共通点がある。若い世代の人びとが、自分たちの生活の質をより向上させたいと考えている様子がうかがえる。

(5) 日常生活で求める情報：教養講座・文化教室 ($p=0.023$)



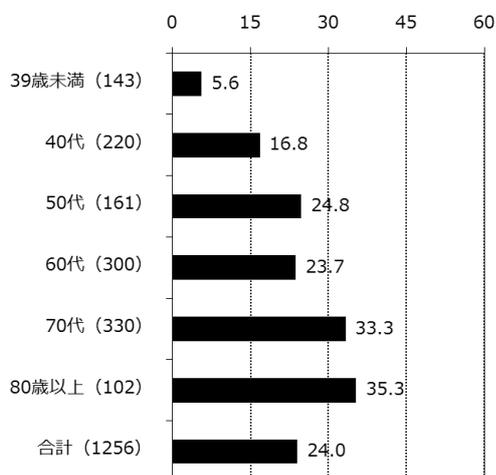
特に、最も若い世代がこうした情報を求めているようである。高い年齢層の人々の関心は、これとは別のところに向けられている様子もわかる。

(6) 日常生活で求める情報：年金 ($p=0.034$)



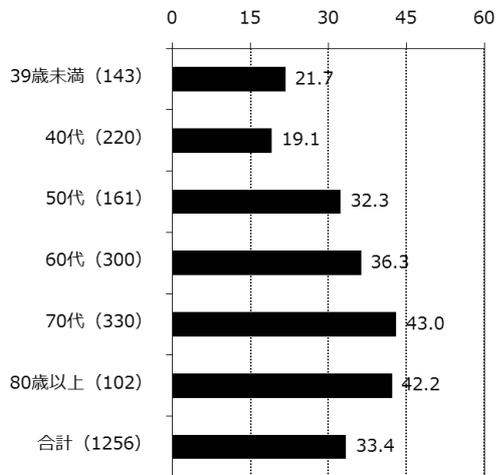
年金受給を間近に控えた50代の人びとが、特に情報を求めているようである。40代以下の人びとは情報を求める声が少ないことから、こうした人びとにとって年金生活はまだ遠いものだと考えられているようである。

(7) 日常生活で求める情報：家事援助・在宅ケア・介護サービス ($p=0.000$)



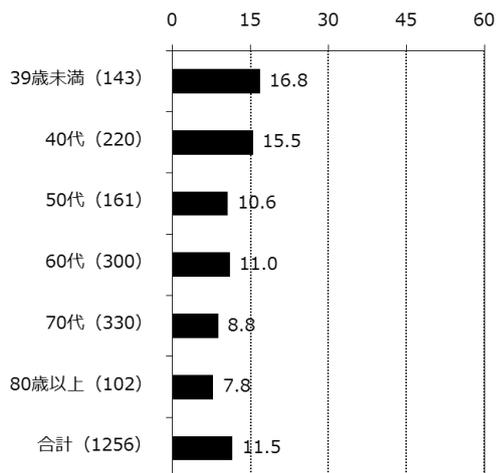
この項目は特に、年齢との関係が顕著にあらわれている。年齢層が上がるにつれて、情報を求める声が高まっているようである。

(8) 日常生活で求める情報：健康づくり ($p=0.000$)



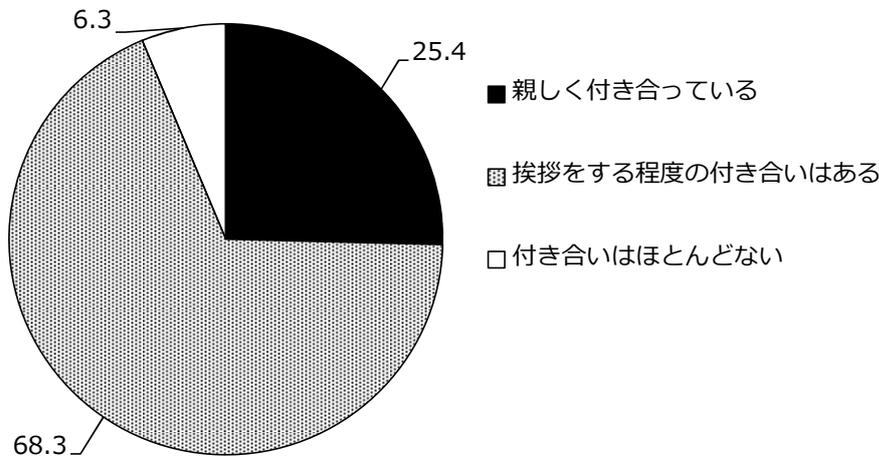
基本的に年齢が高くなるほど、情報を求める声が多くなっている。ただしその様子は直線的ではなく、40代以下、50～60代、70代以上という3つの段階をふむように、関心の度合いが高まっているさまがみてとれる。

(9) 日常生活で求める情報：この中にはない ($p=0.048$)



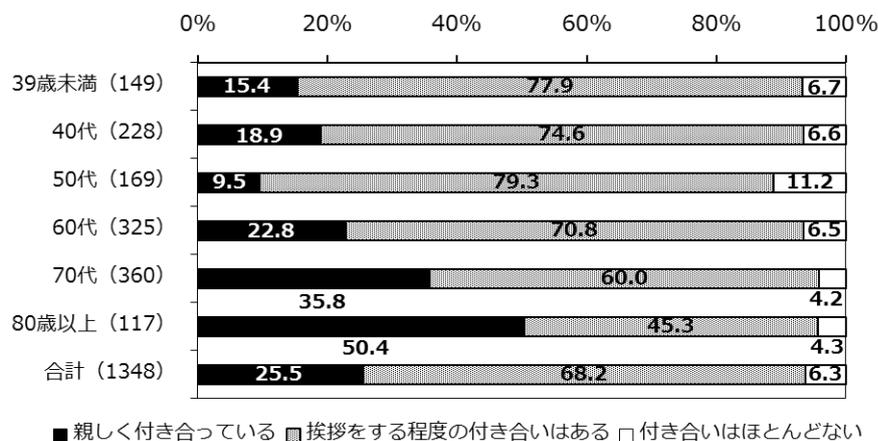
40代以下の人びとは、「特に求める情報はない」と回答する割合が多いようである。こうした世代は普段から様々なツールを活用して多くの情報を得ているため、特別何かの情報が欲しいと考えないのかもしれない。

4.11 近所づきあい程度（問 14）



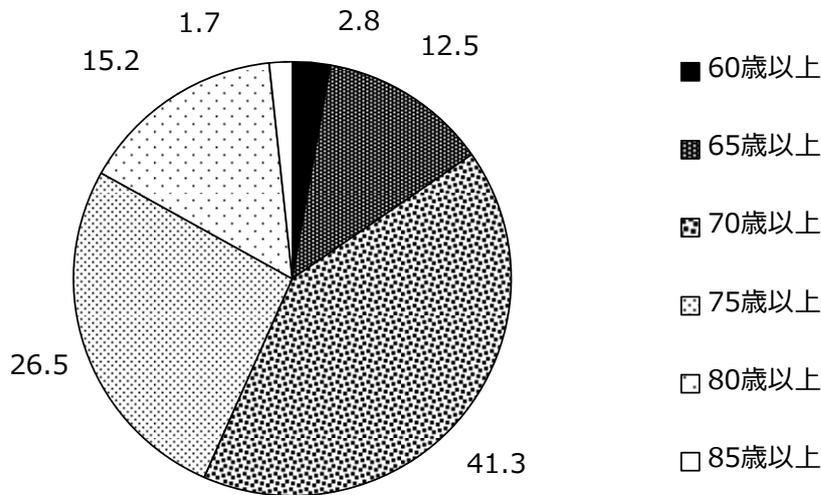
「親しく付き合っている」と回答する者は3割に満たず、「挨拶程度」というものがほとんどのようである。単純に多いか少ないかは判断し難いが、「付き合いはほとんどない」という回答が6%ほどである点は目をひく。

(1) 近所づきあい程度・年齢別 ($p=0.000$)



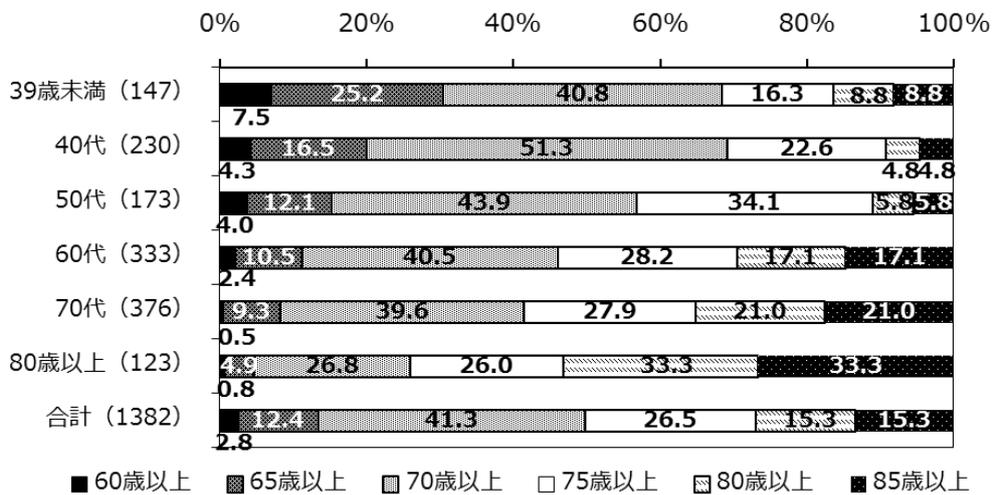
近所づきあいに関しては、よく「若い世代ほど付き合いをもちたがらない」と言われるが、X校区においていちばん付き合いをもっていないのは50代のようなものである。50代に比べると40代以下は比較的付き合いをもっており、「親しい付き合い」をもつ者も少なからずいる。ただし、70代以上に比べればその数は決して多くない。日ごろから近所どうしで密な付き合いをもっているのは、やはり高い年齢層の人びとのようなものである。

4.12 高齢者の基準年齢（問 15）



少なくとも本データにおいては、高齢者かどうかを分ける基準として一番多いのが「70歳」である。次に多いのが「75歳」、その次が「80歳」であり、60代から高齢者とみなす者は多くないようである。

(1) 高齢者の基準年齢・年齢別 ($p=0.000$)

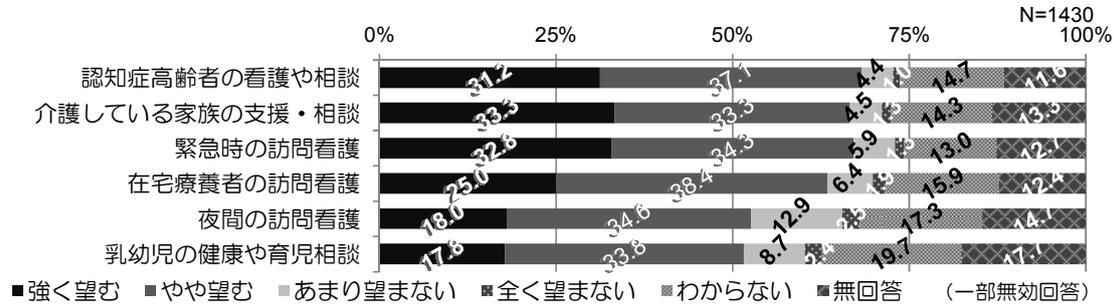


先の傾向はあくまでも全体で見た場合であって、実際には年齢ごとの違いがかなり大きい。「70歳」と回答する割合は年齢が上がるにつれて徐々に縮小していき、さらに上の年齢をこたえる割合が多くなってきている。特に、50代までは「80歳以上」「85歳以上」と回答する割合が少ないが、60代以降はそれが段階的に多くなってきている傾向が顕著である。

5 看護師・薬剤師への要望と健康のための取り組み

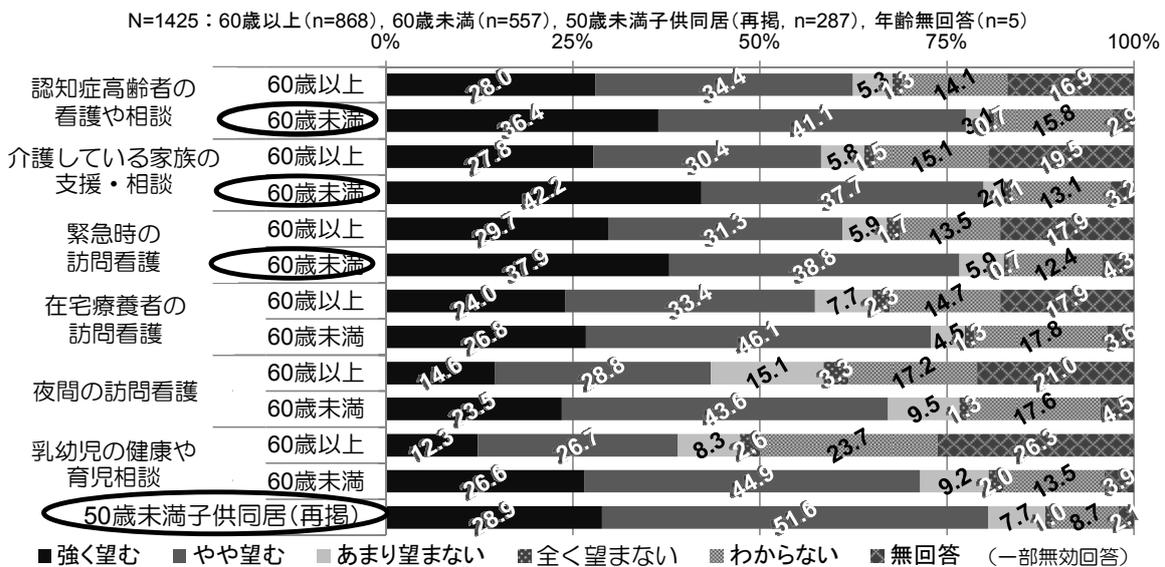
5.1 看護師への要望（問 16）

(1) 全体集計



住民の看護師への要望については、「強く望む」と「やや望む」と回答した住民の割合が、【認知症高齢者の看護や相談】68.3%、【緊急時の訪問看護】67.1%、【介護している家族への支援・相談】66.6%、【在宅療養者の訪問看護】63.4%、【夜間の訪問看護】52.6%、【乳幼児の健康や育児相談】51.6%であり、介護に関する事項が上位であった。しかし、「わからない」と回答した割合13.0～19.7%、「無回答（一部無効回答）」の割合が11.6～17.7%と多く、それぞれの看護への要望を考えたり必要とする状況になかったりする住民が多い、あるいは、看護師への要望を必要とするような地域の問題や課題に関心が少ない住民が一定程度いることが考えられる。

(2) 年齢層別集計



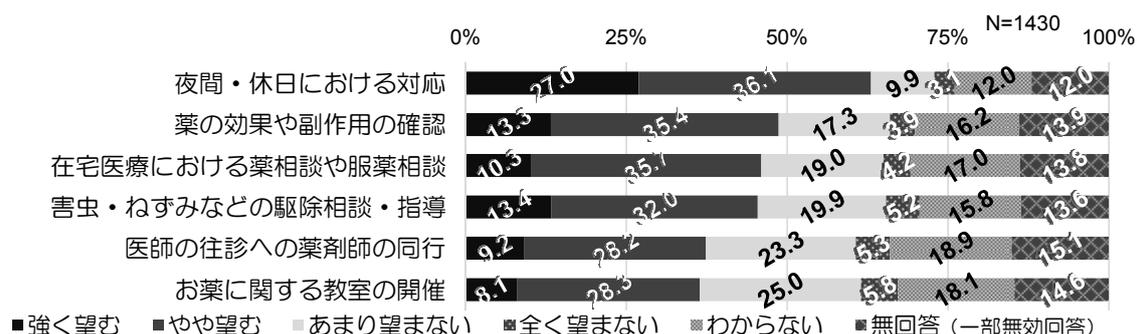
60歳以上と60歳未満の住民で比較すると、すべての項目で60歳未満の住民のほうが「強く望む」と「やや望む」と答えた割合が高かった。特に、【介護している家族の支援・相談】79.9%、【認知症高齢者の看護や相談】77.5%、【緊急時の訪問看護】76.7%と「強く望む」および「やや

望む」と回答した人の割合が高かった。在宅療養を必要とする人を介護している、あるいは、今後介護する可能性のある住民が多いと考えられる。また、50歳未満で子供と同居している住民においては、【乳幼児の健康や育児相談に関する要望】が80.5%と高く、子育て世代のニーズが確実にあることがわかった。このように、介護する側の人が多いと思われる60歳未満の世代の要望が、介護される側が多いと思われる60歳以上の世代の要望よりも、介護と育児の両方で多かったことから、若い世代に、より負担がかかっている事情があると思われる。

さらに、60歳以上の住民では、いずれの項目においても、「わからない」や「無回答（一部無効回答）」が多く、特に【乳幼児の健康や育児相談】では両方を合わせて50%以上を占めていた。高齢者にとっては乳幼児の育児にかかわっている人の割合も低いと考えられ、回答する必要性も低いと思われたと推察できる。今回の調査では回答者自身の要望として質問しているが、居住地域における課題や必要性を共有できるような機会が必要とも考えられる。

5.2 薬剤師への要望（問16）

(1) 全体集計



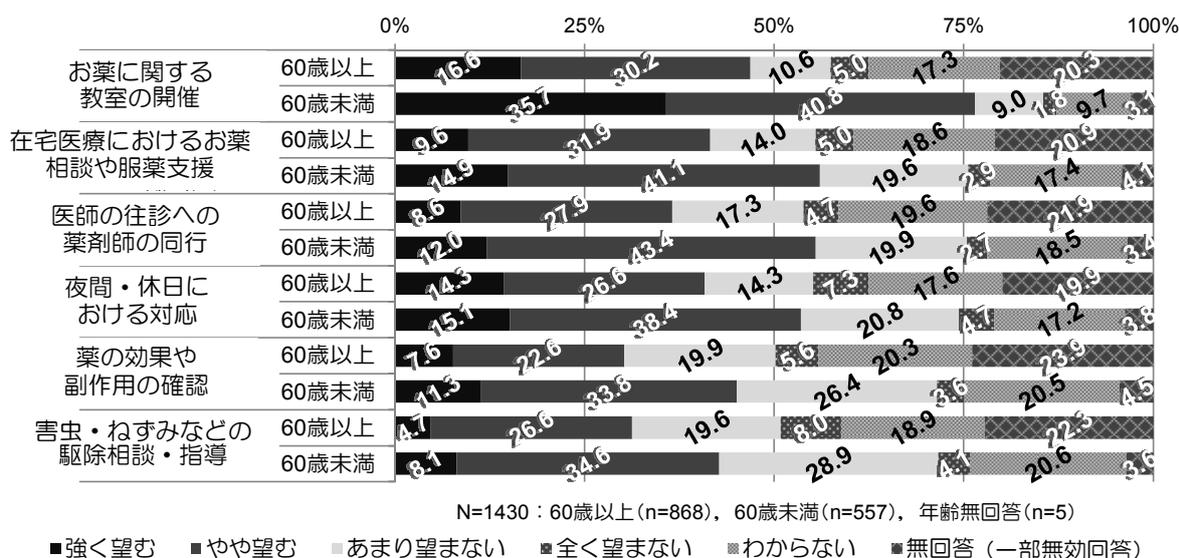
薬剤師への要望について、「強く望む」と「やや望む」と答えた住民の割合は、【夜間・休日における対応】63.1%、【バイタルによる薬の効果や副作用の確認】48.7%、【在宅におけるお薬相談・服薬支援】46.0%、【害虫・ねずみなどの駆除相談・指導】35.4%、【医師の往診への同行】37.4%、【お薬教室の開催】36.4%であった。また、また「わからない」と答えた割合は看護師に対しては13.0～19.7%であり、薬剤師に対しては12.0～18.9%と大きな違いはなかった。

今回の結果では、【夜間・休日における対応】への要望が63.1%と他より14～28%ほど高い傾向になっていた。【夜間・休日における対応】は従来業務の拡張として求められる業務である。一方、今後取り組むべき在宅業務や地域健康拠点としての新しい業務に対しては認知度が低いと思われる。

また看護職に対する「強く望む」と「やや望む」との要望の平均は61.6%であったが、薬剤師への要望は【夜間・休日における対応】は看護師への要望とほぼ同じ63.1%あるものの、平均では44.5%であった。住民は薬剤師の活動にある程度期待はしているが、在宅業務や地域健康拠点

としての新しい業務に対してはイメージしにくかったのではないかと考えられる。これは、今回調査を行った地区だけでなく、全国的に地域での薬剤師のサービスが行き渡っていないため、在宅業務や地域健康拠点としての新しい業務にたいする具体的なイメージやメリットが広まっていない結果と思われる。

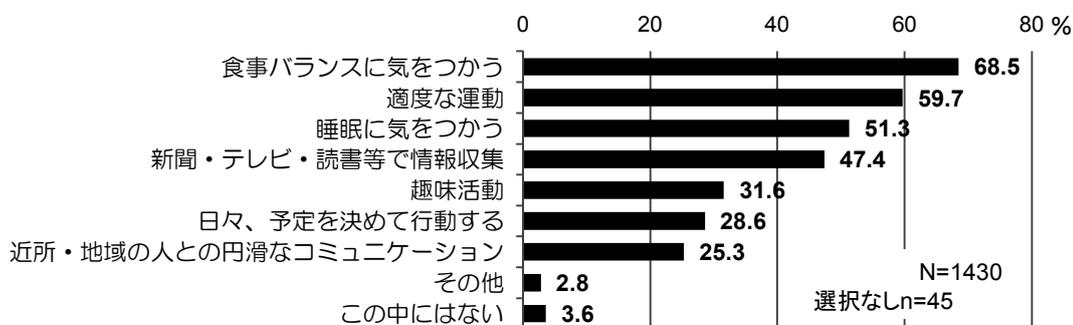
(2) 年齢層別集計



60歳以上と60歳未満の住民で比較すると、すべての項目で60歳未満の住民のほうが「強く望む」と「やや望む」と答えた割合が高かった。これは、高齢の方ほど薬剤師に対するイメージが、処方箋調剤や一般薬の販売など従来業務に対して高く、在宅業務や地域健康拠点としての新しい業務にたいしてイメージしにくかったのではないかと考える。

5.3 健康のための取り組み (問 17)

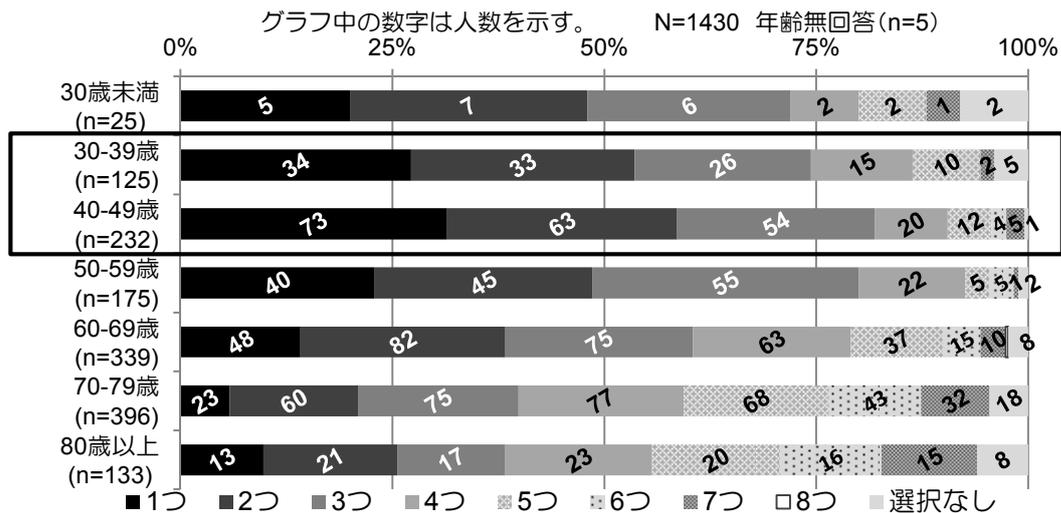
(1) 取り組みの実施割合



各取り組みの実施割合は、【食事バランスに気をつかう】68.5%、【適度な運動】59.7%、【睡眠に気をつかう】51.3%、【新聞・テレビ・読書等で情報収集】47.4%、【趣味活動】31.6%、【日々、

予定を立てて行動する】28.6%、【近所・地域の人と円滑なコミュニケーション】25.3%であった。健康のための取り組みとして一般的にも認知されている食事・運動・睡眠については、50%以上の実施割合であったが、具体的な実施状況はわからないため、より効果的に取り組めるように地域での多様な活動の創生や情報発信が必要と考える。

(2) 年齢層別取り組みの実施数



年齢層別に健康のための取り組みを実施している数を比較した。30～49歳の世代では、実施している取り組みの数が2つ以内である人が50%以上を占めており、取組の数は他の年齢層よりも少ない結果であった。働き盛りの世代でもあり、健康について多くの取り組みが困難な状況にあると考えられる。数が少なくとも効果的に実践できるような支援が必要である。一方、70歳以上の高齢者は4つ以上の取り組みを行っている人が50%以上を占めており、数多くの取り組みが健康につながるような支援が必要と考えられた。

I まず、基礎的なことについておたずねします。

【問 1】 あなたの性別と年齢をお教えてください。

【性別】 1. 男性 2. 女性

【年齢（回答時満年齢）】

1. 30歳未満 2. 30歳～39歳 3. 40歳～49歳 4. 50歳～59歳
5. 60歳～69歳 6. 70歳～79歳 7. 80歳以上

【問 2】 あなたがお住まいになっているのは、以下のどの町内（自治会区域）ですか。

1. A町 2. B町 3. C町 4. D町
5. E町 6. F町 7. G町 8. その他

【問 3】 あなたは、この地区（校区）に今まで何年住まわれていますか。

1. 5年未満 2. 5年～10年未満 3. 10年～20年未満
4. 20年～30年未満 5. 30年～40年未満 6. 40年以上

【問 4】 あなたは現在、どのような方と一緒に住んでいますか。以下のうち、現在一緒に住まいである方すべてに○をおつけください。

1. 自分の父親 2. 自分の母親 3. きょうだい 4. 配偶者
5. 配偶者の父親 6. 配偶者の母親 7. 子ども 8. 子どもの配偶者
9. 孫 10. その他 11. ひとりで暮らしている

II 次に、この地区（X小学校区）に関することについておたずねします。

【問 5】あなたは、X小学校区は暮らしやすいところとお考えですか。以下のうち、あなたの意見に近いもの1つに○をおつけください。

1. 大変暮らしやすい 2. まあ暮らしやすい 3. どちらともいえない
4. あまり暮らしやすすくない 5. まったく暮らしやすすくない

【問 6】あなたは、この地区の生活環境についてどのようにお考えですか。以下のそれぞれについて、あなたの意見に近いもの1つに○をおつけください。

そ強く
う思う
そや
う思う
思あ
わま
なり
いそ
う
そま
うた
つた
わく
わく
ない
い
わ
か
ら
な
い

【生活の利便性について】

A. 交通が便利である	1	2	3	4	5
B. 買い物に便利である	1	2	3	4	5
C. 医療やデイサービスを手近に受けられる	1	2	3	4	5
D. 道路が適切に整備・補修されている	1	2	3	4	5
E. 子どもの遊び場所が整っている	1	2	3	4	5

【安全・マナーについて】

F. 街路の暗がり少なく安全である	1	2	3	4	5
G. 治安が良い	1	2	3	4	5
H. 落書き・違法看板が少ない	1	2	3	4	5
I. 路上駐車・駐輪が少ない	1	2	3	4	5
J. ごみ出しのマナーがよい	1	2	3	4	5
K. 清潔である	1	2	3	4	5
L. ペットの飼育マナーが良い	1	2	3	4	5

【住民の交流について】

M. 隣近所の仲が良い	1	2	3	4	5
N. 住民交流が活発である	1	2	3	4	5
O. 地域活動が活発である	1	2	3	4	5
P. 高齢者にやさしい	1	2	3	4	5

【問 7】あなたは、X 小学校区において行われる地域活動に関心がありますか。以下に挙げるそれぞれについて、あなたの意見に近いもの1つに○をおつけください。

	関と 心が もあ る	関あ るが 程あ る	関あ まり はな い	関ま つは たな い	わ から ない
A. 自治会の活動	1	2	3	4	5
B. PTA の活動	1	2	3	4	5
C. 校区地域協働協議会の活動	1	2	3	4	5

【問 8】あなたは、X 小学校区で現在実施されている以下のような活動に参加されたことがありますか。それぞれについて、あてはまるもの1つに○をおつけください。

	が参 加し たこ と	は参知 な加つ いして たいこ とが、	知 ら ない
A. 自主防災訓練	1	2	3
B. ふれあいサロン（なかよしサロン）	1	2	3
C. 子育て支援（びよびよひろば）	1	2	3
D. まちかど相談	1	2	3
E. X 小学校まつり	1	2	3
F. グラウンドゴルフ大会	1	2	3
G. 挨拶運動	1	2	3

【問 11】あなたは、X小学校区では今後どのようなことに積極的に取り組む必要があると思いますか。以下のそれぞれについて、あなたの意見にもっとも近いもの1つに○をおつけください。

	だ強 とく 思必 う要	だま とあ 思必 う要	だあ とま 思り わ必 な要 い	だま とつ 思た わく な必 い要
A. 防災・防犯に関する取り組み (校区自主防災協議会活動や防犯パトロールなど)	1	2	3	4
B. 高齢者福祉に関する取り組み (高齢者の見守り活動や介護予防など)	1	2	3	4
C. 子育て支援に関する取り組み (悩み相談、子どもの見守り活動など)	1	2	3	4
D. 青少年健全育成・青少年教育に関する取り組み (地域の歴史、文化を教えるなど)	1	2	3	4
E. 地域のきれいな環境づくりに関する取り組み (ごみのポイ捨て防止啓発、地域一斉清掃など)	1	2	3	4
F. 地域住民交流に関する取り組み (お祭りやイベントの開催など)	1	2	3	4

【問 12】あなたは、新しくできた校区地域協働協議会やその他の地域活動に関する情報をどのように発信してほしいですか。以下のうち、あなたがいちばん情報を得やすいと思うもの1つに○をしてください。

1. ホームページ
2. 回覧板・チラシ
3. 自治会などの掲示板
4. その他

【問 13】あなたは、日常生活に関することで今以上に情報が欲しいと思っているものがありますか。以下のうち、もっと情報が欲しいと思っているものすべてに○をおつけください。

- | | | |
|---------------|--------------------|----------------------|
| 1. 地域の行事 | 6. 電化製品 | 11. 医療 |
| 2. ボランティア | 7. 趣味（スポーツ・レジャーなど） | 12. 家事援助・在宅ケア・介護サービス |
| 3. 一般日用品・雑貨 | 8. 教養講座・文化教室 | 13. 健康づくり |
| 4. 衣料品 | 9. 相続・資産運用 | 14. この中にはない |
| 5. 食生活・食事サービス | 10. 年金 | |

【問 14】あなたは普段、近所の人とどの程度の付き合いがありますか。以下のうち、あなたの様子に一番近いもの1つに○をしてください。

1. 親しく付き合っている
2. 挨拶をする程度の付き合いはある
3. 付き合いはほとんどない

III 最後に、健康などのことについておたずねします。

【問 15】「高齢者」という言葉を聞いたとき、あなたは何歳以上の方を頭に思い浮かべますか。以下のうち、あなたの意見に近いもの1つに○をおつけください。

- | | |
|----------|----------|
| 1. 60歳以上 | 4. 75歳以上 |
| 2. 65歳以上 | 5. 80歳以上 |
| 3. 70歳以上 | 6. 85歳以上 |

【問 16】あなたは、X 小学校区での保健衛生や在宅医療などに関して看護師や薬剤師にどのようなサービスを望まれますか。以下のそれぞれについて、あなたの意見にもっとも近いもの1つに○をおつけください。

強く望む やや望む 望あまりない 望またくない わからない

[看護師に対して…]

A.	在宅療養者の訪問看護	1	2	3	4	5
B.	認知症高齢者の看護や相談	1	2	3	4	5
C.	介護している家族の支援・相談	1	2	3	4	5
D.	夜間の訪問看護	1	2	3	4	5
E.	緊急時の訪問看護	1	2	3	4	5
F.	乳幼児の健康や育児相談	1	2	3	4	5

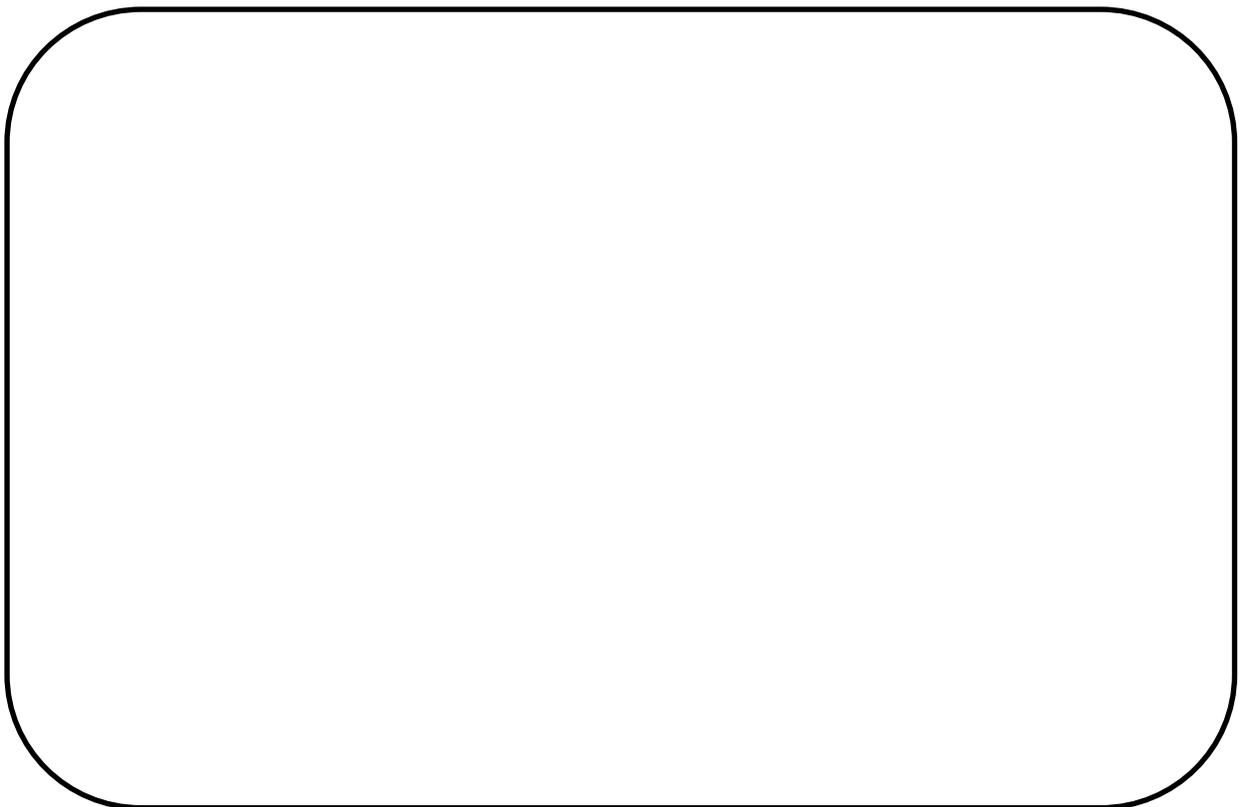
[薬剤師に対して…]

G.	公民館や老人クラブなどでのお薬に関する教室の開催	1	2	3	4	5
H.	在宅医療におけるお薬相談や服薬支援	1	2	3	4	5
I.	医師の往診への薬剤師の同行	1	2	3	4	5
J.	夜間・休日における対応	1	2	3	4	5
K.	聴診器や血圧計を用いた薬剤師による薬の効果や副作用の確認	1	2	3	4	5
L.	害虫・ねずみなどの駆除相談・指導	1	2	3	4	5

【問 17】あなたは心身の健康のために何か取り組んでいることがありますか。以下のうち、あなたが普段取り組んでいるものすべてに○をおつけください。

- | | |
|------------------------------|------------|
| 1. 食事バランスに気をつかう | 6. 適度な運動 |
| 2. 睡眠に気をつかう | 7. 趣味活動 |
| 3. 近所・地域の人との円滑な
コミュニケーション | 8. その他 |
| 4. 新聞・テレビ・読書等で情報収集 | 9. この中にはない |
| 5. 日々、予定を決めて行動する | |

質問は以上です。最後に、X 校区地域協働協議会や自治会などの地域の活動について、ご意見などがあれば自由にお書きください。



ご協力、誠にありがとうございました。